

平成 18 年度 NGO 専門調査員報告書
開発教育 NGO の新たな役割
住民のニーズに基づくエンパワーメントを目指して

平成 18 年度 外務省 NGO 専門調査員 岡 美恵子
地球共育の会・ふくおか
福岡市中央区舞鶴 2-8-15

目次

1. 受入団体概要及び専門調査員略歴	3
1-1. 受入団体概要 地球共育の会・ふくおか について	
1-2. 専門調査員の略歴	
2. 調査・研究活動内容	4
2-1. 実施期間	
2-2. 活動目的及び背景	
1) 目的	
2) 背景	
2-3. 活動内容	
1) 活動内容の決定プロセス	
2) 活動内容	
2-4. 活動手法	
2-5. 予定期待効果	
3. 調査・研究活動報告	6
3-1. 実施結果・分析	
1) 関連概念の整理	
2) PRA 研修/各種ワークショップの参与観察および聞き取り調査	
3) カンボジア国における調査研究（第1回）	
4) カンボジア国における調査研究（第2回）	
3-2. 今後の課題・対処方法	
4. 所感	36
5. 付録	37

1. 受入団体概要及び専門調査員略歴

1-1. 受入団体概要

【受入団体】 地球共育の会・ふくおか

1997年設立。地域に根ざした開発教育活動を目指し、ワークショップ(参加・体験型学習)によって参加者同士が共に学び合える場を提供している。

人々が本来持つちからを十分に発揮することのできる社会をめざし、平和・開発・人権・環境などの課題を主体的に考え行動できる態度・技能・知識を育み、平和で公平・公正な世界の実現に寄与することを目的としている。

【主要な活動領域】

① 人材育成

実績:地域リーダー育成、学習/PRAファシリテーター育成、ボランティア育成

② ファシリテーター、講師派遣

実績:国際理解教育、人権教育、コミュニケーション等

③ ワークショップ企画/運営

実績:地域リーダー/子どもサポーター講座、社会教育主事/公民館主事/教員研修

④ ワークショップ・プログラム/教材開発

実績:自己表現、カラー・ワークショップ、教材「大切なものはなんですか」

⑤ 調査研究:

実績:外務省NGO専門調査員、福岡市人権啓発センター共同研究

⑥ ネットワーキング

実績:各種団体、教育行政等とのパートナーシップの構築

1-2. 専門調査員の略歴

青年海外協力隊(日本語教師/モンゴル派遣)に参加後、地元福岡にて日本語学校教師として勤務。その後(財)福岡県国際交流センター、(社)青年海外協力協会【NPO化により(特活)九州海外協力協会となる】にて国際理解教育のコーディネーター業務に従事。

国際理解教育のコーディネーターとして勤務中、様々な教育機関関係者と国際理解教育のプログラムを作る中で「何を指して実施するプログラムか」を常に考えてきた。ただ、海外での経験や海外での暮らしを語るだけではない、参加者(受講者)が自ら考え、何らかの行動に繋がられるようなプログラム作りができないかと考えていた時、ワークショップ形式の開発教育に出会う。

ワークショップを通して新しく得た知識、気付きや発見を、これまでの自分の経験や知識で得てきたものと複合させ、主体的に考え、行動する…参加者同士が共に学び合える参加型の開発教育そのものが、知識だけではない人々のエンパワーメント実現に大きく貢献することができるのではないか、開発教育の可能性に惹かれている。

2. 調査・研究活動内容

2-1. 実施期間

本調査・研究は、2006年5月1日～2007年3月31日に実施した。

うち、海外調査は、2006年9月11日～18日、2007年3月12日～18日にカンボジア国にて実施した。

2-2. 活動目的及び背景

1) 目的

- ① 住民のニーズに基づいた具体的なエンパワーメント指標を解明する。
- ② 開発教育 NGO の開発協力における「媒介者」としての役割を検証する。
- ③ 住民のニーズを引き出す手法としての「PRA 手法」の有効性を探る。

2) 背景

地球共育の会・ふくおか(以下、GIA)は、PRA 研修や地域づくりワークショップの実施経験から、開発教育の視点を取り入れたワークショップは、人々のエンパワーメントを実現し人間開発を促進する可能性が大きいという認識を深めてきた。また、平成 17 年度からは、カンボジア国にてワークショップを行い、途上国を対象とした実践と国内における取り組みを繋げることにより、双方向のエンパワーメントを実現することに力を注いできた。その中で、開発教育と開発協力を繋げることが、開発協力の場において住民相互のエンパワーメントを実現することに効果的であり、住民の主体的な行動を促進することができるのではないかと考えるに至った。

しかしながら、これらの取り組みの中で「事業を実施して参加者が得る『力』(エンパワーされる側面)は、誰のニーズなのか。支援側の理想に基づくニーズではないのか。」という疑問が出てきた。また、「当事者の真のニーズをどう把握するのか」という新たな課題も生まれた。

GIA の活動は、対象者のエンパワーメントに寄与することを目的としたものが多く、今後プロジェクトを形成していく上で、当事者のニーズを把握することが重要となってくる。しかしながら、GIA においてどのような概念をベースに、どのようなアプローチを行うのが明確になっていない現状があった。これらのことから、当事者のニーズを把握するアプローチの有効性の検証を行い、検証に基づき有効だと考えられるアプローチを用いて把握したニーズを満たすために実施するワークショップがどのような「力の獲得(エンパワーメント)」に寄与するのかを整理し指標化することが求められていた。さらに指標化することにより、そもそもプロジェクトとして計画することが難しい「エンパワーメント」を目的としたプロジェクトの形成が可能になるのではないかと考えた。

また、開発協力において開発教育 NGO は「媒介者」としての新たな役割を果たせるのではないかと実践から考えられ、どのような機能を有することによって役割を果たせるのか明らかにすることが求められていた。

2-3. 活動内容

1) 活動内容の決定プロセス

GIA スタッフと活動内容について協議し、活動計画を策定した。また、月 1 回のミーティングにおいても、GIA スタッフと話し合いを重ね、活動を行った。

2) 活動内容

- ① PRA 研修、各種ワークショップの参与観察および聞き取り調査 (添付資料 1)
目的:住民のニーズに基づいた具体的なエンパワーメント指標を解明する。
住民のニーズを引き出す PRA 手法の有効性を探る
- ①-1 PRA 研修への参与観察を行い(参加者の記録、講師及び住民への半構造インタビュー)、

PRA 研修の有効性を検証する。

- ①-2 各種ワークショップの参与観察を行う(参加者の記録、ふりかえりシートの分析)。
- ①-3 GIA 内において各種研修及びワークショップで得られた情報の共有を促進する。

② カンボジア国における調査・研究(第1回)

目的: 当該国におけるワークショップの内容、実施形態、有効性について検証し、より当事者のニーズに対応したワークショップの実践に役立てる
開発教育 NGO の果たす「媒介者」としての役割を検証する

- ②-1 GIA が当該国で実施するワークショップの参与観察を行い、その有効性を検証する。
- ②-2 開発教育と開発協力の連携の可能性を検証するための聞き取り調査を行う。

③ カンボジア国における調査・研究(第2回)

目的: 開発教育 NGO の果たす「媒介者」としての役割を検証する。

開発教育の視点を取り入れ開発された調査プログラムの有効性を検証する。
住民のニーズに基づいた具体的なエンパワーメントの指標を解明する。

- ③-1 開発教育の視点を取り入れ開発された調査プログラムの参与観察を行う
- ③-2 住民のニーズに基づいた具体的なエンパワーメントの指標を解明する。
- ③-3 開発教育と開発協力の連携の可能性を検証する。

2-4. 活動手法

- ① 研究論文、文献、インターネットの活用による情報収集
- ② 半構造インタビュー調査と質問紙調査によるデータ収集
- ③ 調査研究対象のワークショップ・プログラムへの参与観察/評価/提言

2-5. 予定期待効果

- ① 開発教育 NGO の「媒介者」としての役割が明確になる。
- ② 地域関係機関・国際協力団体とのネットワークを構築し、連携が図れる。
- ③ 内発的動機付けを実現するワークショップの可能性とそのアプローチが具体化する。
- ④ 住民のニーズを引き出す手法としての PRA 手法の有効性が明確になる。
- ⑤ 住民のニーズに基づいたエンパワーメント指標が解明される。

3. 調査・研究活動報告

3-1. 実施結果・分析

1) 関連概念の整理

本報告書の中での関連概念は、平成 17 年度調査員報告書の中で使われたものと同義で使用する。ここでは平成 17 年度調査員の「概念の整理」を簡単にまとめたものを記載する。

① 開発教育とは

GIA は、開発教育を「人々が本来持つちからを十分に発揮することのできる社会を目指し、平和・環境・開発・人権などの課題を主体的に考え行動できる態度、技能、知識をはぐくむための教育活動」と考えている。

開発教育における重要な概念である「開発」については、「『開発 (development) 』とは『封じ込められた状態 (envelopment) から解き放つ (de-) 』という意味が含まれている。つまり、開発とは、経済、社会、心理、精神的側面など、様々な要因で『封じ込められた状態』から開放され、全ての人が人間らしく豊かに生きていけること」だと明言している。

② 地域とは

本報告書における「地域」とは、行政区や学校区のような社会空間としての地域ではなく、生活者が課題を認識し、問題解決を図る上での具体性をもちうる場とする。行政のセクター別の縦割り構造ではない「地域」という視点から課題を捉えていくことにより、各セクターの連携が促進され生活者の視点に立った包括的な解決につながる可能性があり、自らが関わりを持つ場であるためオーナーシップの醸成に貢献すると考える。開発という概念を軸としている開発教育にとって、自らの足元である地域という視点は特に重要である。

③ ワークショップとは

ワークショップとは、グループで活動する際の手法の一つである。本報告書における「ワークショップ」とは、「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で何かを学びあったり創り出したりする、双方向的な“学び”と“創造”のスタイル」とする。(中野 2001)

ワークショップと同様の意味で使用されること多い参加型学習とは、「学習者の社会参加をねらいとした学習であり、またその参加を実現するための多様な方法・手法によって特徴づけられる学習である」と(開発教育協議会 2002)で定義されている。「開発教育が参加を重視するのは、開発教育のねらいのひとつが問題解決のための『参加』を促すこと(開発教育協議会 2002)だからである。しかしながら、GIA において「ワークショップ」と「参加型学習」は明確には区別されていない。本報告書においては、「ワークショップ」という表現を、開発教育ワークショップの意味で使用する。

④ エンパワーメント概念の整理

エンパワーメントという用語は様々な分野で用いられているが、本報告書においては、開発協力の文脈におけるエンパワーメントを扱う。開発教育という教育活動が、開発協力の文脈においてどのようにエンパワーメントに関わるのかを考察し実践から分析するからである。

佐藤(2005a)は、「『エンパワーメント』は日本語では『力づけ』『力の付与』などと訳すことができるように、本来他動詞的に用いられる言葉である。すなわち他者が『誰か』(開発援助の文脈では援助の受益者、対象者)を『力づける』のである。」と述べている。つまり、開発協力においては、開発される当事者(プロジェクトの裨益対象住民)以外に、開発を支援する「外部者」の存在が前提とされている。また、エンパワーメントとはエンパワーする側の「理想の開発の姿」ではないかという問題提起がされている。

藤掛(2003)はエンパワーメントの各分野での定義または用いられ方を整理しており、「力(能力)をつける」という立場と「力は剥奪されている」という前提に立つ立場があり、森田ゆり(人権問題)に関してはそのどちらにも属さないかたちで分類している。

GIAにおいて、森田(1998)の考え方「人と人とお互いに内在する力にどう働きかけ合うかということ。お互いがそれぞれ内に持つ力をいかに発揮しうるかという関係性である。潜在的にもっているパワーや個性を再び生き生きと息吹かせること」にスタッフは共感している。しかしながら、開発協力の文脈におけるエンパワーメントは、佐藤(2005)が指摘しているように、本来政治的なアプローチであり、社会の構造を変革すること、社会内部の関係性を変化させることなしには達成できないために、介入は介入者と対象者だけの自己完結的なものではありえず地域社会全体の変化を視野に入れなければならない。

本調査においてはフリードマン(1995)の中で整理されているエンパワーメントの3つの要素「社会的」「政治的」「心理的」の中の「心理的」「社会的」エンパワーメントに焦点を当て、開発教育と開発協力の連携を考えている。これらを踏まえ、本報告書におけるエンパワーメントは、「力は剥奪されている」という前提に立ち、「貧しい人々や被抑圧者たちが、自分たち自身で決定権を持てる集団を組織し、自分たちの状況を意識化し、自信や尊厳を得て他者と対等に接したり、開発のためのイニシアティブを自らとったりすることができるようになることを意味する」というフリードマン(1995)の定義に依拠する。これは、開発教育NGOや開発教育ファシリテーターは「力をつけさせる」支援をするのではなく、「力を取り戻す」そのプロセスを促進するという視座にたっている。

平成17年度調査員は、このような立場から調査を行い、「地域社会のエンパワーメントとは、『地域社会の人々が、自分達の願うより良い生活を営むために、社会的、経済的、政治的、文化的に自己決定権を獲得するプロセス』である」と実践から導きだしている。また、カンボジア事業におけるエンパワーメントは、「自ら意思決定できる力の獲得」として実施している。

2) PRA研修、各種ワークショップの参与観察および聞き取り調査

目的:一住民のニーズを引き出す手法としての「PRA手法」の有効性を探る。

一住民のニーズに基づいた具体的なエンパワーメント指標を解明する。

① PRA研修の参与観察および聞き取り調査からの考察

■ 調査対象研修の選定

今年度、GIAが国内に於いて実施した3件のPRA研修の参与観察を行った。3件のPRA研修の概要に関しては、表1の通りである。調査員は以下の理由により、今回の調査対象として大分県日田市小河内町でのPRA研修を選定した。

一研修の直接的な対象者は外部からの参加者であったが、地域住民が研修プログラムの策定の段階から関わり、プログラムの随所で対象地域住民の参加が得られたことにより、住民の意識変容の観察・分析が可能である。

一地域の選定や住民との関係づくりの全てをGIAが独自で行っており、住民へのインタビュー等が容易に行える。

一他の2つの研修では、対象がJICA九州の技術研修員であり、事前や事後に対象地域の住民と接する場が限られており、住民の意識変容の観察・分析が困難である。

一他の2つの研修では、JICA九州の技術研修員との会話が英語で行われたため、研修員の真意を理解することが困難である。

表 1:「平成 18 年度 GIA が実施した PRA 研修」

	大分県日田市小河内町	大分県佐伯市蒲江町	長崎県北松浦郡小値賀町大島
事業名	「ネパールのカマルさんと参加型開発を学ぼう」	「アセアン地域振興セミナー」PRA 研修 (JICA 九州技術研修)	「島嶼における自立を目指した地域資源活用による人づくり・地域づくり」PRA 研修 (JICA 九州 草の根地域提案型事業)
主催者	地球共育の会・ふくおか JICA 九州	JICA 九州	小値賀町役場 JICA 九州
対象者 参加者	国際協力・参加型開発に興味のある方。国際協力を携わりたい方、もしくは現在、携わっている方 21 名	上記研修コース参加者 8 名	上記研修コース参加者 4 名
講師	カマル・フィアル氏	GIA スタッフ	GIA スタッフ
目的	参加型の手法や考え方、外部者として地域に関わる姿勢を学ぶ。講師、参加者、住民が経験や知恵、考え方を交換し合い、地域づくりにおける「参加」のあり方を学びあい、より深く「参加」について考える。	PRA と PLA に関する基礎知識を習得し、自国の地域振興政策における新たなアイデアを見つけ出す。	1) 小値賀型の住民参加型地域づくりの実体験 2) 国際協力/日本の町づくりで実践される手法の体験 3) 大島住民が参加する PRA の外部ファシリテーターを研修員が体験する
期間	2 日間	6 日間 (実質的な研修期間は 5 日)	4 日間 (実質的な研修期間は 3 日)
使用 ツール	ロールプレイ、将来構想図、トランセクト、マッピング、共同作業、交流、SWOT 分析、グループディスカッション	地域視察、トランセクト、マッピング、半構造インタビュー、フォーカス・グループ・インタビュー、ベン相關図、SWOT 分析、グループディスカッション	地域視察、半構造インタビュー、トランセクト、マッピング、交流、ベン相關図、SWOT 分析、グループディスカッション、

【調査方法】

実施前ヒアリング(住民)、PRA 研修の参与観察、研修期間中の半構造インタビュー(住民、講師)、研修参加者への質問紙調査、実施後のフォーカス・グループ・インタビュー(住民)を行った。これらで得た情報を基に、PRA の有効性について「エンパワーメント」の観点から考察した。

【エンパワーメントのプロセスと質的变化の抽出】

フリードマン(1995)はエンパワーメントを「社会的、政治的、心理的エンパワーメント」の 3 つの形態に分類しており、それぞれについて次のように述べている。

- 1) 社会的な力…情報、知識、技術、社会組織への参加、財的資源など、世帯での生産の「基盤」となるものへのアクセスに関わるもの。
- 2) 政治的な力…世帯の個々の成員が自らの将来に影響を及ぼすような様々な決定過程に加わることに関わるもの。投票する力だけを意味するのではなく、意見の表明や集団行動による力をも意味する。
- 3) 心理的な力…個人が潜在力を感じる力であるというのが最も適当な言い方であろう。心理的な力が存在している時には、それは自信ある行動となって現れる。心理的なエンパワーメントは社会的・政治的な領域での成功の結果をもたらされることが多いが、主観的な行動の結果生まれることもある。個人が潜在力を感じる力を増すと、世帯の社会的な力や政治力を強めようとする闘いに相乗的なプラス効果が生じる。

また、これら 3 つの力の関係性として、フリードマンは「世帯は社会的な力の基盤(※1)を相互的、螺旋状的に築いていくなかで、社会的な力を獲得し、その過程を通してさらに『政治的な力』が生まれてくる。…(中略)『心理的エンパワーメント』とは、右に述べた螺旋状に進むプロセスのあらゆる局面で生じる。」と表している。

※1:フリードマン(1995)は社会的な力の基盤を「暮らしの糧の生産において世帯経済を支える主要な手段」とし、それらを 8 つに整理している。「①防御可能な生活空間、②余剰時間、③知識と技能、④適正な情報、⑤社会組織、⑥社会ネットワーク、⑦労働と生計を立てるための手段、⑧資金これら社会的な力の八つの基盤は、それぞれ別個のものではあるが、相互依存的でもある。というも、これらはすべて、社会的な力を増やす螺旋状の過程を通じて互いに他の力の増加手段を得る手段だからである。」

調査員は PRA 等の参加型アプローチにおける外部者の役割は、地域住民の自己実現を行うためのきっかけや条件を整えることであり、そのためには PRA という調査手法の中においても、住民の「エンパワメント」を促進することが重要であると考えている。そのため、「エンパワメント」の視点から、GIA の行った PRA 研修の有効性を整理することにした。なお、その際、フリードマン(1995)に基づき、エンパワメントを「心理的」「社会的」「政治的」の3つの分類を用いて整理した。

調査員は、フリードマン(1995)の整理による心理的、社会的、政治的エンパワメントはその根底で繋がっており、最終的な「社会関係の変革」というエンパワメントの目的に辿り着く過程において、そのいずれもが必要であると考えているが、GIA が行うような短期間の研修では、住民の「政治的な力」を高めるところまでは確認することが困難であった。したがって、今回の調査においては住民達のヒアリングから共通のキーワードを抽出し、その中から得に「心理的エンパワメント」と「社会的エンパワメント」に関係すると思われるキーワードを分類した。

以下は、住民のプログラム実施前、実施中のヒアリング、実施後のフォーカス・グループ・インタビューから得られた情報を基に整理したものであるが、ヒアリングやインタビューの対象者が5～6名であり、分析に十分な数ではなかったことを注意しておく。

表 2:「エンパワメントのプロセスと質的变化の整理」(大分県日田市小河内町 PRA 研修)

対象	エンパワメントの形態	プロセス	質的变化
対象地域住民	心理的エンパワメント	<ul style="list-style-type: none"> ・参加する ・発言する ・新しい視点を得る ・比較する ・地域を客観的に見る ・地域を再認識する ・他者の意見を聴く ・他者と意見を共有する 	<ul style="list-style-type: none"> ・帰属意識が高まる ・地域への誇りが生まれる ・自己分析ができる ・他者理解ができる ・視野が広がる ・主体的に学べる ・やる気がおきる/意欲が高まる ・様々なことに興味・関心を持つ ・将来の地域における自分を描ける(夢・希望) ・可能性を感じる
	社会的エンパワメント	<ul style="list-style-type: none"> ・新たな発想を得る ・気づきを得る ・他者に認められる ・自らが考える ・夢を描く 	<ul style="list-style-type: none"> ・連帯感が生まれる ・仲間を得る ・参加の場を得る ・発言回数が増える ・リーダーシップを発揮する ・適正な情報を得る ・自分をとりまく社会への関心や理解が深まる ・主体的な行動/活動を模索する

【考察】

＜1. PRA の効果に関する仮説＞

調査員が参与観察を行った PRA が、住民を直接対象にしたものではなかったことを考慮すると、ここで得られたエンパワメントのプロセスと質的变化が一般的な PRA で得られるものと同様のものではない可能性が高い。そのことを恐れず、今回の結果から PRA の効果に対する仮説を立てるならば

- 1) PRA では、地域ベースで物事を見ていくため、社会的エンパワメントが促進される確立が高い。(情報や技術など、共有できるものが多く、そこから様々な生産の「基盤」となるものへのアクセスに関わるものが生まれる可能性が高い)
- 2) 新たな視点を得て、新しいものではなく、既存のもの良きや資源を再認識していく中で、地域の可能性を見つけられる。(新たな視点を得ることは、対象地域住民だけでは難しいことがあり、外部者の視点が必要となることが多い。)
- 3) 2 の結果、自分をとりまく人・事象への関心や理解が深まる。

- 4) 2の結果、自分の地域に誇りを持つようになり、帰属意識が高まる。
- 5) 発言等の機会を得る、外部者に自分の地域を教える、外部者に自分の地域を褒められる…等のプロセスを経て、心理的なエンパワーメントが高まる。
- 6) 身近なコミュニティの中で行われるため、主体的な行動/活動を模索することが容易である。
- 7) 社会的学習(他者モデルの体験を検分する代理経験)により、自分の地域を客観的に分析し、課題解決のヒントを得られる。
- 8) 夢・希望という将来的なビジョンを外部者と住民を取り巻く人々と皆で共有することで、開発に対する住民のモチベーションが高まる。

また、PRA 研修の効果として確認しづらいものとしては、以下のものが挙げられる。

- 1) 対象地域住民の関係性の変化が確認しづらい。これは、PRA が調査として関係者の把握や再認識までを目的としても、人間関係の改善までを目的にしていなくても理由の一つであると考えられる。また、今回の研修が短期間であったことの影響もあるかもしれない。
- 2) 住民一人ひとりが個々人の能力の高まりを感じる機会が少ない。開発プロジェクトのプロセスにおいては、新しい知識を得たりすることで、住民は自分自身の能力の高まりを感じる機会が多々あるが、PRA が開発プロジェクトの事前調査の手法として用いられた場合、PRA の段階では、住民自身の能力を高めるという学習的要素は不十分である。

調査員は、これらの仮説から住民のエンパワーメントの実現には、「PRA のプログラムに含まれる要素」と「外部者」が重要な役割を果たしていることに注目した。

<2. PRA のプログラムに含まれる要素について>

a) 「社会的学習の要素」(仮説7)により得られる効果

「社会的学習」の効果については、フリードマン(1995)の「オルタナティブな開発の十カ条の結論」の一つでも挙げられている。フリードマンは「地域に中心をおくオルタナティブな開発に、社会的学習アプローチを適用すると、成功する可能性が高い。…(中略)プロジェクトの中心を地域や地方に定めるためには、相互学習、忍耐強い意見聴取、異なった意見の受容を必要とする。」と述べている。

今回、PRA の効果として7)「社会的学習を取り入れることで、自分の地域を客観的に分析し、課題解決のヒントを得られる」の仮説を挙げたのは、プログラムで行った「ネパールの村の縮図版(ロールプレイ)」に参加した住民から「ネパールの村の縮図版はよかった。ネパールの村の話をしていただけ、最終的には自分達の村の話に返ってきた。気付いたら、自分の村のことに当てはめて考えていた。」というコメントが寄せられたからである。今回の研修が小河内という小さな集落で行われたことを考えると、自分の地域だけに目を向けて、皆でその社会構造を読み解くというのは、村人同士の関係性を考えても困難であったと考えられる。しかしながら、全く異なる「ネパールの村」のことを考える中で、村人がそれらを自分の村に当てはめて村や村人の関係性を分析し、村の社会構造の再認識をしていたことは、他者モデルを用いた「社会的学習」の興味深い効果である。

また、通常 GIA によって実施される開発教育のワークショップにおいて行った参加者への質問紙調査からは、以下のような社会的学習に関する意見が確認されている。

- ・ 様々な体験を通して、問題を身近に感じられる。
- ・ (ワークショップでは)いろいろな立場に立つことができる、そして自分がどういった立場にいて、これからどうすればいいのかを指し示してくれる。
- ・ 体験を通して、知識だけではなく気持ちがわかり、共感できる。

質問紙からは、これらの社会的学習の効果として「自分や自分の置かれている社会の状況分析ができた」「思いがけない課題解決方法に出会えた」等が確認できた。参加者は「体験する」「知る」「共感する」といった社会的学習の要素に含まれるプロセスを経て、その結果「視野が広がる」「課題解決力が

高まる」「適正な情報を得る」「主体的な行動/活動を模索する」などのエンパワーメントの質的变化を生み出していた。このことから、社会的学習には①参加者の課題解決力を高める、②社会的エンパワーメントに繋がりやすい、等の効果があると考察できる。

b) 「夢や希望などの将来的なビジョンの共有」(仮説 8)により得られる効果

仮説 8)の「夢/希望という将来的なビジョンの共有が、住民のモチベーションをあげる」というのは、ヒアリングでの住民のコメント「村が将来こうなるといい…という話をしていた時、村人も結構、話をしていた。みんな話すことがあるのだと感じた。」に基づく。このヒアリングに応じた住民は、研修実施前の打ち合わせでは「村の人たちは本気で村のことを考えていない。話し合いの場を持って、誰も意見を言わないから、村の事業も自分が率先して企画し、実施している。」と話していた。村人達が「村のことを考えている」という事実を知ったことは、この住民にとって大きな驚きであると共に、喜びであったようである。他にも、「村人と参加者の方達が話しているのを見て、みんな夢を持っているんだな、と感じた。楽しかった。」というコメントも出ていた。また、今回の研修終了後のフォーカス・グループ・インタビューにおいては、更に住民達が「具体的にどういったことをしたいか」と夢を実現するための方法について話し合う姿も観察でき、「夢や希望」を描き共有することは「楽しい」ことであり、住民の話し合いへの参加や発言を促進する重要な要素であると感じた。

<3. 外部者の役割>

住民のフォーカス・グループ・インタビューでは、「外部者の役割」に関わるものとして、以下のようなコメントが出された。なお、ここで取り上げる「外部者」とは、ファシリテーターの役割を担った講師のカマル・フィアル氏の他、GIA スタッフ及び研修参加者を指し、「外部者」＝「ファシリテーター」ではない。

(※2)

- ・ カマルさんの「いいところ」をさがすというお話は、なるほどと思った。つつい問題点や課題に目がいきがちだが、やっぱり「いいところ」を探すというのは大切な視点だと思った。
- ・ カマルさんの講義の中の、ネパールの村の縮図版はよかった。
- ・ 親子や村人同士が面と向かって話さないような話も、第3者がいることで、話しやすくなる。
- ・ よそから来た人がいると、いろんな話が出てくる
- ・ 外部者が関わることで、村の若い人たちに興味を持ってもらえる。
- ・ 外の人に来て、村のいいところを見てもらえるのは嬉しい。とても嬉しくて、つつい話すぎてしまった。
- ・ 参加させてもらって楽しかった。自分の村といえども、なかなかゆくり調べたりすることはないので、今回の研修を機に、じっくり村のことを調べたのは面白かった。
- ・ 研修に参加した人たちが『太陽発電』を褒めてくれていた。でも、それらは私達にとっては当たり前のこと。すごいだなんて思ったことはなかった。そういうことに気付くことができるのは、いいことだと思う。
- ・ 外にいる人が、村のことを褒めてくれるのは嬉しい。
- ・ 人がこの場所にこんなにたくさん集まっているのが嬉しい。いろんな世代の人たちが集まっていて、いろんな意見が出てくる。私達も気軽に入りやすい。いろんな人たちが意見を出し合える場があるというのが、素晴らしいことだと感じた。小河内でも今後、こういった場が創ればいいと思った。
- ・ みんなで話が出来たのは楽しかった。こういう場を作ることが大切だと感じた。
- ・ 若い人たちがたくさん来たことが嬉しかった。通訳の方の活動を始めて間近で見ることができた。

これらのコメントから確認された「外部者の役割」は以下の通りである。

- 1) 住民に新しい視点を提供する。(例:①他者モデル、②ないものではなく、あるものを活かす)
- 2) 様々な話ができる場(村人や親子ではなかなかしないような話をする場)を提供する。
- 3) 外部者が地域の価値を認めることにより、住民が当たり前の凄さに気付く。

※2 「続・入門社会開発」(2000)では「ファシリテーターは、外部者だけに限られて課せられる役割ではない。地域社会の中に「ファシリテーター」の役割を担える人びとが内在化されるならば、それは、地域社会のエンパワーメントとも呼べるであろう」と述べられている。調査員も「外部者」の担える役割として「ファシリテーター」の役割があるものの、それは「内部者」でも可能なものであり、「外部者」の役割はそれだけではないという視座に立ち、調査を行った。

- 4) 外部者が参加することで、住民のモチベーションが高まる。(例:①自分の村を調べてみる、②村の若い人たちが関心を寄せる)
- 5) 場作りの重要性、他者の意見を聴く機会の重要性を認識する。
- 6) 住民と分かち合い、共に学ぶ(例:①夢・希望、②住民の知恵・経験)

したがって「外部者」は、住民との関わり方やプログラムによっては、「村/村人の経験・知識や対象地域の地理・環境」を明らかにする活動を促進するだけではなく、住民のモチベーションを高め、エンパワメントの促進に寄与できると感じた。

<4. 調査の課題>

今回行った「エンパワメント」の視点からの有効性の検証は、調査対象が少ないことと、住民の参加した研修が本年度は1件であり、仮説の実証にいたらなかったことから、十分な検証とは言えない。今後、今回の仮説を実証するためのプログラムが必要となる。

<5. その他 :事例集の作成について>

調査員は、GIA は研修や活動の成果を、より積極的に外部に発信していく必要があると考える。GIA は九州において「開発教育の NGO」「ファシリテーターを派遣する組織」として広く認識されているが、「PRA 研修(特に「子ども参加」の概念を取り入れた PRA 研修)」を実施していることはあまり知られていない。そのため、様々な団体との情報共有により PRA プログラムの質を高めていくことや、GIA の活動の場の拡大(GIA が独自のフィールドを得ることを含む)を目的とした広報媒体が必要である。調査員はこれらの必要性から、本年度 GIA が実施した PRA 研修の事例集の作成に取り組んだ。事例集には、写真を多く取り入れ、各研修プログラムの概要や成果などを簡単に記した。今後、GIA スタッフが事例集を活用することで、他団体との情報共有や活動の場の拡大がなされることを期待している。

② 各種ワークショップの参与観察からの考察

■ 調査対象ワークショップの選定

本年度、GIA は数々のワークショップを実施したが、今回の調査対象のワークショップとして、「カンボジア写真教材を使用したワークショップ」を選択した。これは、以下のような理由による。

- 1. 「子どもの権利」を基にしたエンパワメント「自ら意思決定できる力の獲得」を目的としたプログラムである。
- 2. プログラムを教材化していく中で、その特徴や効果をはかることが期待されている。
- 3. 教材作成に向けて、多くの実践を重ねており、調査対象者が多い。

■ カンボジア写真教材「大切なものは何ですか？」を使用したワークショップ

【調査方法】

平成 17 年度に GIA が作成した写真教材「大切なものは何ですか？」(以下、GIA 独自教材)を活用したワークショップを様々な場(教員対象研修、大学生や高校生を対象とした連続講座、一般市民を対象にしたワークショップ等)において実施し、調査員はその参与観察を行った。講座終了後には「質問紙」を準備し、参加者に「このワークショップを通して気付いたこと」や、「学んだこと」を記載してもらった。

【エンパワメントのプロセスおよび質的変化の抽出】

本ワークショップの特色は、プログラムの中で多様な表現方法が用いられること、「自己⇒他者⇒社会」と段階を経ながら自分とそのまわりの社会を捉えることができること、カンボジアの高校生と共通の体験を持ち、そこで得られるものを共有していくことによるカンボジアと日本の参加者の双方向のエンパワメントを目的としていることである。

GIA は現在、本ワークショップ・プログラムの教材化に取り組んでおり、教材の活用方法や有効性につ

いても協議を重ねている。調査員は「エンパワーメント」の視点に立ったプログラムの有効性の検証のため、本プログラムで得られる「心理的エンパワーメント」と「社会的エンパワーメント」の質的变化について、質問紙から得られる回答を基に整理を試みた。

〈質問紙調査〉

標本数:142/ 抽出方法:全数調査(全数:142) /調査方法:講座内で配布

調査日:平成 18 年 11 月 21・27 日

有効紙数:142(回収率 100%、全数における有効紙割合:100%)

表 3:「エンパワーメントのプロセスと質的变化の整理 (カンボジア写真教材「大切なものは何ですか」)

活動	エンパワーメントの形態	プロセス	質的变化
カラーWS	心理的エンパワーメント	<ul style="list-style-type: none"> 参加する 体験する/触れる (カンボジア国子どもと同じ体験の共有) 見つめる(自分、他者、社会) 自分と向き合う/認識する(今、将来) 考える 表現する(色/言葉) 	<ul style="list-style-type: none"> 安心感を得る(人に邪魔されず自分と向き合う場が確保できる) 表現の多様性を知る 表現力が高まる 自己肯定感情が高まる 段階を経て視野が広がる 他者理解/他者受容の準備ができる
	社会的エンパワーメント		<ul style="list-style-type: none"> 参加の場を得る 自分をとりまく社会への関心や理解が深まる
フォト WS (大切なものの WS)	心理的エンパワーメント	<ul style="list-style-type: none"> 参加する 体験する/触れる (カンボジア国子どもと同じ体験の共有) 見つめる(自分、他者、社会) 自分と向き合う/認識する(今、将来) 考える 知る(適正な情報) 決定する(大切なものの選択/自分で写真を撮る) 表現する(絵/写真/言葉) 他者の意見を聴く/共有 新たな発想/気付きを得る 	<ul style="list-style-type: none"> 安心感を得る(発言の場が守られる) 自信を獲得する 自己分析ができる 課題解決能力が身につく ※ コミュニケーション能力/表現力が高まる 自尊感情が高まる 他者理解/他者受容ができる 視野が広がる 自己決定ができる 主体的に学べる やる気がおきる/意欲が高まる 様々なことに興味・関心を持つ 将来の自分を描ける(夢や希望を持つ) 可能性を感じる
	社会的エンパワーメント	<ul style="list-style-type: none"> 他者に認められる 比較する 想像する 共感する 	<ul style="list-style-type: none"> 連帯感が生まれる 参加の場を得る 発言回数が増える リーダーシップを発揮する 適正な情報を得る(権利/カンボジア国の現状/適切な課題解決策へのアクセス方法) 自分をとりまく社会への関心や理解が深まる 主体的な行動/活動を模索する

【考察】

〈1. エンパワーメントのプロセスに伴うもの〉

表 3 に記載されるプロセスには「楽しさ」「喜び」「成長の実感」が伴うことが、質問紙から読み取れた。その他、特徴的な記載としては「みんなで」「一緒に」「共に」といった表現が目立ったことが挙げられる。ワークショップへの参加により、連帯感が生まれてきていることが強く感じられ、「人的ネットワーク(ワークショップという限られた場での人との繋がりではなく、日常生活における友人や仲間)の構築」といった社会的エンパワーメントに繋がっていると感じた。

〈2. 参加者のエンパワメントのプロセスと開発協力におけるエンパワメントの重要性について〉

参加者からの質問紙によるフィードバックを得て、本プログラムにおける参加者の学び、エンパワメントのプロセスが明らかになった。参加者は、「知る(自分→他者→社会)⇒考える⇒他者と比較する(想像する・共感する)⇒**新しい(予期せぬ)気づき/発見**⇒**自分自身の可能性の発掘**⇒**自らの自発的な行動意欲**」というプロセスを経て、エンパワメントのための質的变化を得ていた。学生の一人はこのプロセスを言葉で、次のように表している。「自分の考えた意見をグループの人に聞いてもらうことで、安心感や嬉しさも味わえた。何より、意見交換を通じて一人だけでは絶対に思い浮かばない考えや発想を得て、それらを自分の中に取り込み学習し、新たな視点や考えを生み出せることは、自分を成長させてくれるようで嬉しかった」と述べている。これらは、平成 17 年度の調査員の分析(※3)によるエンパワメントの要素における「気づき」「能力開花」の部分に相当すると考えられ、この後、**自発的な行動意欲を実行できる場の獲得**が必要となる。

通常、開発協力の現場で、プロジェクトになるのがこの「自発的な行動意欲を実行できる場」であり、「自らの自発的な行動意欲を促進する部分」までが、PRA におけるファシリテーターが関わる部分である。しかしながら、野田(2006)が指摘するように「参加型のアプローチは、終わりのない長く続く地域住民の開発発展プロセスを支援するもの」である。そのために重要なことは、住民の自発的な行動意欲に繋がるための「心理的エンパワメント」と、その行動意欲を行動に繋げるための「連帯感」や「適正な情報へのアクセス」「リーダーシップの発揮」などの「社会的エンパワメント」の実現ではないだろうか。PRA は「すでに準備された開発プロジェクトの事前調査」として用いられるのではなく、PRA において「住民のエンパワメントを実現すること」が必要不可欠なことであり、PRA を通して住民が、**可能性を発掘し**、**自主的な行動意欲**が芽生え、その結果、住民自らが**自発的な行動意欲の実行**として開発に取り組むことが理想である。したがって、PRA においては「住民のエンパワメント」の実現をねらいにしたプログラムが必要であると調査員は考える。

④ 今後の可能性について:

a) ワークショップが果たしうる内発的動機付け

今回の調査から、GIA が実施する開発教育の視点を取り入れたワークショップには「楽しさ」「喜び」「成長の実感」が伴うことがわかった。滝澤(1998)は「学習活動の成否の重要な要因をなしているのが、学習意欲である。学習意欲が高まると、人間を学習行動に駆り立て、それを維持し、さらにこれを一定の方向に導いていく。こういうはたらきを動機づけと呼んでいるが、これには外発的動機づけと内発的動機づけとがある。…(中略)内発的動機づけは、知ること事態が楽しいとか、技能が上達することがうれしそうとかいうように、学習行動そのものが目標となっているばあいの動機づけである。」としており、調査員は「内発的動機づけを十分にすることができれば、学習者は自身により学習を持続させることができる。したがって、『楽しさ』『喜び』『成長の実感』が伴うワークショップはその内発的動機づけの一端を担える」と考えている。

また、ワークショップにおける内発的動機づけの一番の源泉は「心理的エンパワメントの高まりの実感(=成長の実感)」ではないかと調査員は考える。それは GIA が行うワークショップの参与観察から、心理的エンパワメントの質的变化を感じている参加者達が「引き続き〇〇について調べてみたい」「自分も何かできることをしたい」など、自分自身で次の目標を設定しようとする姿が観察されたからである。GIA のワークショップで参加者が感じた心理的エンパワメントの質的变化は、人によって様々であり、「この活動を実施したらこのエンパワメントが実現される」というような位置づけは非常に困難であると感じた。それではなぜ、GIA のワークショップが心理的エンパワメントの実現に寄与できるのかについては、調査員は参与観察や質問紙による調査から①ファシリテーターの「共に学ぶ姿勢」が参加者

※3 平成 17 年度調査員はエンパワメントの構成要素を「a)気づき、b)能力開花、c)能力を発揮する場の獲得」だと整理している。

の主体性を育てている、②様々な視点からプログラムが作られており参加者の思考や体験のプロセスが多岐に渡っている、③「ルール」や「権利」を参加者が互いに認め合うことで参加・学びの環境が整えられている、ことが原因ではないかと考えている。GIA が行う「開発教育の視点を取り入れたワークショップ」は心理的エンパワメントの質的变化を感じている参加者が多く、GIA のワークショップは内発的動機づけに寄与していると考えられる。

これらの特徴を活かし、ワークショップを用いて人々の自主的、持続的な学習に働きかけることが可能であると考えられ、開発協力の現場においても「人々の参加」「持続的な学習」を促進できるという可能性を感じた。

b) 効果的な PRA のプログラムの開発について

本調査により、PRA においては「住民のエンパワメントの実現」が不可欠であり、その実現のためには「プログラムに含まれる要素」が重要であるという認識を持った。その要素として調査員が目にしたのが「社会的学習」と「夢や希望などの将来的なビジョンの共有」であるが、これらは今後、GIA がプログラム開発において取り入れていくことを十分検討できる要素ではないかと考えられる。例えば、「社会的学習」の要素は開発教育のワークショップに多く含まれているものであり、GIA スタッフはファシリテーターとして「社会的学習」を効果的に実施する方法と経験を蓄積している。また、「夢や希望などの将来的なビジョンの共有」の要素を含むプログラムは、GIA スタッフにより既にプログラムが作成され、実践を重ねているものがあり、PRA の現場においての活用が期待されている。

また、PRA 研修で確認しづらかった効果として「人の関係性の変化」と「個人の能力の高まりの実感」を挙げたが、これらについても GIA の実施したワークショップ参加者から、実現を期待できるようなコメントが得られており、PRA のプログラムを補うことが可能だと考えられる。

今後、PRA に関しては、「外部者」が担える役割のどの部分で GIA は力を発揮できるのか検証し、プログラムにおける GIA の役割を明らかにすることが重要である。また、PRA のプログラムに関しては、仮説から導きだされる効果的な要素と不足している要素を補うプログラムを作成することで開発教育 NGO の強みを活かした PRA の実施が可能になると考える。そして、PRA の現場で発揮できる GIA の役割を、他団体の人たちに対してどのようにアピールしていくのが課題であると感じている。

c) エンパワメントを目的としたプログラムにおける RBA(ライツ・ベース・アプローチ)の適用

カンボジア写真教材「大切なものは何ですか?」を使用したワークショップ・プログラムでは、「意見表明権」「表現の自由」を実体験してもらうことも重要な要素の一つであり、調査員は実践の場の参与観察から、権利として人々の表現が守られていることを伝えていくことが重要であると考えている。なぜなら、「表現」を自分が保持する権利として捉えることができた参加者からは、自主的な活動への参加の姿勢が見受けられたからである。フリードマン(1995)には、「オルタナティブの開発は、一般的な意味でも具体的な意味でも、人間性の開花を可能にする社会的な社会的条件への権利を主張するのである」とあるが、改めて「権利の主張」ができるようになることが、エンパワメントの視点においても重要なことであると認識させられた。

また、高校生を対象にしたワークショップでは、「意見表明権」を知った高校生達が自由に自分の意見を表現する活動を行って、「すっきりした」というコメントを残した。彼らとの対話から見えたことは、彼らが意見表明権を知る必要があると同時に、家庭や学校生活、社会生活において彼らの意見表明権が守られる環境が必要であるということである。その部分へのサポートができて初めて、ワークショップで学んだ「権利」の行使ができ、彼らのエンパワメントに繋がるのではないだろうか。

エンパワメントを実現するために、「当事者が権利を行使できる」「当事者の権利が守られる/権利を行使できる状況を確保する」ということは重要なことであり、GIA が実施する「子どもの権利」に基づき作成されたプログラムにおいては、今後、「当事者にどのようにして権利を伝えていくか」「権利を行使できる状況をどのようにして確保させるか」という視点を含めて「RBA」の手法を研究していくことが期待さ

れる。

3)カンボジア国における調査・研究(第1回)

実施期間:平成18年9月10日(本邦発)～平成18年9月10日(帰国)

調査地:カンボジア国プノンペン市

調査形態:『南』の子ども支援 NGO 能力強化5ヵ年計画5年度海外研修(JANIC、ユニセフ協会主催)へのオブザーバー参加

ワークショップの参与観察、半構造インタビュー、団体訪問/視察

協力機関・団体:(順不同)

- ・(特活)国際協力 NGO センター(JANIC)
- ・UNICEF カンボジア事務所
- ・JICA カンボジア事務所
- ・国際子ども権利センター カンボジア事務所
- ・(社)シャンティ国際ボランティア会(SVA)
- ・(特活)国際保健協力市民の会=シェア
- ・Health Care Center for Children(HCC)
- ・FRIENDS
- ・Legal Support for Children and Women(LSCW)
- ・Child Rights Foundation(CRF)

目的:一住民のニーズを引き出す手法としての「PRA 手法」の有効性を探る。

一開発教育 NGO の開発協力における「媒介者」としての役割を検証する。

期待される成果:

GIA が開発したエンパワーメントを目的としたワークショップ・プログラムの有効性が明らかになる。また、「当事者(住民)の真のニーズ」とは何を指し示すのかが明らかになり、ニーズ把握のための手法として本プログラムの PRA 研修への応用の可能性が考察される。

NGO の研修として実施されるワークショップの参与観察が行われ、開発教育 NGO である GIA が開発協力の現場で果たしうる「媒介者」としての役割が明らかになる。

① GIA が実施するワークショップの参与観察を行い、その有効性と応用の可能性を検証する。

『南』の子ども支援 NGO 能力強化5ヵ年計画5年度海外研修の一環として、GIA スタッフが Health Care Center for Children(以下、HCC)のシェルターにおいて「子どものエンパワーメント・ワークショップ〜コミュニケーションで育む”Dream Tree”」を実施。研修の参加者とシェルターの子ども達と一緒にワークショップに参加した。

■ ワークショップの概要

〈ねらい〉

- プログラムの上位目標:子どものセルフエスティームが高まる
- 本研修におけるプログラムのねらい:様々な関係性において信頼を育む(おとなと子ども、外部者と住民、NGO スタッフと住民、等)
- 成果:
 - ①子ども達が嬉しさや優しさ、苦しみや悲しみなどの感情を表現することができる
 - ②子ども達が表現を通して、他者との相互理解を深めるコミュニケーションができる
 - ③子ども達が、将来への希望や夢を表現することができる

<内容>

内容	ねらい
①アイスブレイキング(ゲーム) ②今の気持ちを色で表す	・参加者：緊張が解れる、興味関心をひく、やる気がおきる ・参加者相互の関係：知り合う、コミュニケーションが始まる ・プログラムに対して：気づく、意欲がわく
①カラーワークショップ ②Dream Tree	・WS への集中・熱中、自分と向き合う ・相互理解を深める、信頼感を育てる、協力して成し遂げる ・知る、体験する、理解を深める
ふりかえり	・ふりかえり、自己の再発見、行動変容へつなげる ・分かち合い、この人に会えてよかった、一緒に何かを始めよう

■ ワークショップの有効性の検証

今回のワークショップは「NGO 能力強化」研修の一環として行われ、様々な関係性における信頼関係の構築と、「子どもの権利条約」の中の「表現の自由」に焦点を当てて作成されたプログラムによる子どものエンパワメントを目的としていた。

これらの目的を達成するために、カンボジアの子ども(以下、子ども)と日本の NGO 関係者(以下、日本人)をペアにし、ワークショップに参加してもらった。また、「表現の自由」を体感する方法として塗り絵やコラージュを用いた。これは参加者に様々な表現方法を知ってもらうためだけでなく、子ども達が識字教育を十分に受けていない可能性があること、また、日本人とペアになるため異言語間でのコミュニケーションの障壁があることを考慮したためであった。

表 4: 子どもと日本人のプログラムにおける関係性の整理

段階/活動	子どもの様子 (調査員とペアになった「K」の様子と全体的な子ども達の様子)
第 1 段階 アイスブレイキング ペア作り	アイスブレイキング…一気に緊張がほぐれ、笑顔が見られる。 ペア作り…ペアが決まった瞬間は、少し不安そうな子どもと、ペアの相手と手を取り合って喜んでいる子どもと 2 種類の反応が見られる。
第 2 段階 塗り絵	子ども達同士でお互いの活動の様子を頻繁に覗きこむ。隣の子を真似て作業をする様子が見られる。 ↓ ペアになっている日本人に関わろうとする姿勢が見られる。 (例:「K」が調査員の絵を指差し、自分から「サ・アー(クメール語で「綺麗」の意味)」と声をかけてくる。子ども達の姿勢が全体的に日本人の参加者に寄り添う姿勢になり、ペアがはっきりとわかるようになる。子ども達の中には、隣の子の真似をやめて、日本人の真似を始める子が出てくる。) ↓ 子ども達が自分達のペースで活動を始める。 (例:塗り絵の作業が「真似」から、次第に「自分の絵」になってくる。塗り絵の周りに、風船や大きな花を描いた子がいる。子ども達同士が日本人をあまり気にせずおしゃべりを始め、にぎやかになってくる。) ↓ 日本人と子ども達の間境目がなくなる (例:輪になった状態で作業をしている子ども達が、誰ともなしにお互いの作品を見せ合う。子ども達の表情は笑顔であり、見せた絵に対して、子ども達が反応しても、日本人が反応しても、どちらも嬉しそうに誇らしげである。)
第 3 段階 塗り絵の感想共有	子ども達は、輪になった状態で、皆の前で塗り絵の感想を発表。自発的に発表していたが、子ども達の中で順番があるらしく、発表の順番を譲り合う様子も見られる。
第 4 段階 Dream Tree の作成	子ども達と日本人は別れて作業を行い、お互いをあまり意識していない。子ども達は、たくさんの写真の中から好きな写真を切り抜く作業に没頭し、楽しんでいる様子。作業に関して、スタッフに自ら質問してくる場面も見られる。
第 5 段階 子ども達の夢の発表(Dream Tree を用いて)	子ども達は輪になった状態で、自主的に発表をする。発表の方法は様々。一人ひとりの発表中、周りの子ども達は笑顔で見守っており、終わると自然に拍手が聞かれる。 調査員が子ども達と Dream Tree の写真を撮りたい旨を説明すると、皆、快く応じてくれる。
第 6 段階 プログラムの終了 昼食交流	プログラムの終了の際、別れを惜しむような素振りを見せる子もいる。 昼食の準備が出来たため、皆、食事の場所へ移動する。食事の場所への移動は、子ども達が日本人の手を引く場面も見られる。また、食事中も子ども達は日本人の食事の世話をしたり、ジェスチャーを交えて会話をしようとする。

【考察】

<1. 様々な関係性における信頼関係の構築について>

参与観察では、子ども達がプログラムの早い段階(表4の第2段階)で「日本人に関わろうとする姿勢」を示したことが確認された。また、最終的に日本人と子ども達は非常にいい関係を築くことができていた。したがって、本プログラムの「様々な関係性における信頼関係の構築」という目的は、少なくとも「全くの外部者で、初対面である日本のNGOスタッフとHCCシェルターの子ども達」の間においては達成されたと言える。達成された理由として、調査員はプログラムで与えられた「きっかけ」の効果が大きいと考える。

調査員自身も本プログラムにおいて、一人の子ども(「K」)とペアになり作業をした。表4の第1段階では、「ペアになった」という意識はあっても、どうやって関係性を構築すればよいかかわからず、お互いに戸惑いを隠せなかった。しかしながら第2段階では2つの作業を機に、関係性に変化が起こったことを実感した。それは、「二人で一つのクレヨンを共有したこと」「同じ塗り絵を実施し、更に、相手と塗り絵を交換して相手の塗り絵に色を塗る作業があったこと」である。これら二つのことに共通するのは「相手に対する配慮が必要である」ということである。そのため、関心が自然と相手へ移っていくのがわかった。また、「二人で一つのクレヨンを共有する」ことにより、お互いの空間的な距離も近くなっていくのが感じられた。次第に座る位置が近くなり、最後は自然に手を取り合ったり、握手をしたりするようになった。

参加者は始めのアイスブレイキングで楽しい時間を共有したことや、互いが「外国人」とであるという好奇心から、おそらく「いい関係を構築したい」という気持ちは少なからずあったものと考えられる。しかしながら、そのきっかけは「クレヨンの共有」と「塗り絵の交換」だったのではないだろうか。自然なきっかけを得た子ども達と日本人は、自然な形で寄り添うことができたと感じた。

<2. 様々な表現活動>

参与観察からは、子ども達が活動を楽しんでいる様子が確認され、今回の色を使うという実施形態は、子ども達の「表現したい」という気持ちを阻まない、また、「表現する楽しさ」を実感するという意味で成功していると感じられた。色を使ったワークショップは、他の非識字者(識字教育を受けていない人々や文章を書くのに十分な年齢に達していない子ども達)に対しても応用できるプログラムであると感じた。

また、カンボジアの子ども達は、非常に堂々と自分達の作品を発表しており、発表以外でも自分の作品を人に見せることを積極的に行っていた。自分の作品を人に認められることや、自分の意見に他の人が耳を傾けてくれることは、非常に嬉しいことであり、自信に繋がる。子ども達の笑顔や堂々とした様子を観察しながら、子ども達にそういった場を提供することの重要性を感じた。

■ 今後の可能性についての考察

<1. PRAにおける応用の可能性 ①モチベーションを高めるプログラム>

“Dream Tree”は、子ども達の「夢」や「将来の希望」を写真の切り抜きを用いてカラーージュするプログラムである。PRA研修において得られた知見から、調査員は「夢・希望という将来的なビジョンを外部者と住民を取り巻く人々と皆で共有することで、開発に対する住民のモチベーションが高まる」という仮説を立てていた。参与観察から子ども達の「活動に没頭する」「子ども同士で作品を見せ合う」「互いの夢を確認する」「積極的に発表を行う」「作品を大切に作る」等、主体的に活動に参加する様子が確認され、活動に対する「モチベーションの高まり」が感じられた。

また、前述したように、今回のプログラムは「信頼関係の構築」にも寄与できる可能性が確認されており、識字・非識字者の双方が楽しく参加できるプログラムでもある。これらのことも「内発的動機付け」の側面から、住民のモチベーションを高める一助になると考えられ、PRAにおける応用の可能性を高めている。

〈2.PRAにおける応用の可能性 ②住民のニーズ把握〉

“Dream Tree”の活動を通して、彼女たちの「夢」や「将来への希望」だけでなく、彼女達の内面を垣間見ることができた。例えば、コラージュの際、多くの子ども達が選んだ写真に「子ども」「綺麗な洋服」「家」の写真があった。これらの写真については、子ども達から以下のようなコメントを得ることができた。まず、「子ども」に関してだが、「子ども」の写真を貼っていた4名のうち1名は「子どもが好きだから」というコメントをし、残りの3名は「妹/弟がほしい」というコメントをしていた。「綺麗な洋服」では予想通りの「綺麗な洋服を着たい」といった子が半数、残りの半数は「こういうものが作れるような技術を身につけたい」と話していた。また、最後の「家」の写真では「安心して暮らせる住居がほしい」「DVのない家に住みたい」といったコメントが多く聞かれた。これらは、彼女達のこれまでの経験と欲求が表面化したコメントである。

例えば、「綺麗な洋服」では、「こういうようなものが作れるような技術を身につけたい」「こういう洋服を着たい」⇒「職業訓練、知識習得の機会を得たい」「仕事が欲しい」「収入が得たい」「これまで、綺麗な洋服を着る機会が少なかった」、「家」では、「安心して暮らせる住居がほしい」「家庭内暴力のない家に住みたい」⇒「DVの問題を解決したい」「防御可能な生活空間が欲しい」「DVの問題が身近にあった」「安心して暮らせる住居がなかった」等と読み取ることができないだろうか。この検証のためには、より多くの参加者との対話が必要になるため現段階では可能性でしかないが、このワークショップの参与観察から、Dream Treeの活動は、潜在的な欲求や経験を知るのに役立つという可能性を感じた。

平成17年度の調査員により、「ニーズ＝奪われている力」であるという仮説が立てられ、同時にそれは「開発協力を支援する側の『ニーズ』に基づいていないか。」という指摘がなされた。「エンパワーメントを目的としたとき、そこに到達するまでには多くの手段が必要になるが、この手段を講じるためには、当事者の真のニーズを把握していることが欠かせない」という平成17年度の調査員の考察を受け、「真のニーズをどのように把握できるのか」が課題となっていた。

平成17年度の調査員の仮説に従うなら、「真のニーズを把握する」とは、「住民の奪われている力が何なのかを知る」ことである。そして、開発関係者が果たせる役割は、それを取り戻す(＝エンパワーメント)過程をサポートすることである。

しかしながら、これまでの参与観察から、「住民の奪われている力」を知ることは容易ではないと感じた。なぜなら、それらが何者かによって目の前で奪われたものであれば、住民達は自ら語るできるのであるが、「力」を奪っているものが必ずしも目に見える第3者ではなく、「環境(環境・文化等の社会的環境を含む)」などであるからではないだろうか。また、それらの「環境(環境・文化等の社会的環境を含む)」は住民にとっては始めから自分自身を取り巻いていたものであり、それらによって「力を奪われている」という認識は芽生えにくいのではないだろうか。

本プログラムの参与観察から、調査員は「住民の奪われている力」を知るためには、住民がすでに意識化している「欲求」を「ニーズ」として受け止めるのではなく、第3者による「住民を取り巻く環境」や「これまでの経験(能力)」「欲求」等、潜在化しているものを意識化する手助けが必要であると考えた。特に住民の経験(能力)を知るためには、「言葉」だけではなく、自分の内面を投影できるような「物(塗り絵/コラージュ)」を通してのイメージ化も有効な手段の一つであると今回の参与観察を通じて感じた。内面を投影したものをツールとし、住民との対話を重ねる中で、住民の潜在化しているものを意識化していくことが可能ではないだろうか。

また、住民がこれらを意識化する過程で適正な情報や新たな気づきを得ることによって、自分達は力を奪われているという認識を持ち、「奪われている力」を取り戻すことの必要性を認識することが重要であると考えている。

〈3. 開発教育 NGO が開発協力において果たしうる「媒介者」としての役割〉

今回のワークショップの参与観察から、NGO スタッフの能力強化のための「研修」としてワークショップの場を活用できる可能性を感じた。

今回のワークショップは、「『南』の子ども支援 NGO 能力強化 5 ヵ年計画 5 年度海外研修」の一環として行われたものであり、GIA はこのワークショップを通して参加者である NGO スタッフに「子どもと大人の組み合わせにより、子どもとの距離のとり方や姿勢を学んでもらう」ことを期待していた。今回、研修参加者(NGO スタッフ)の中に「子どもと普段、接することが少ないため、初めて出会う子どもとの作業が不安である」と事前に相談をしてきた参加者がいたが、この参加者はプログラム終了後「初めて出会った子どもと共に作業ができた。嬉しかった。ワークショップに興味を持った。」と報告をしてきた。このことから、GIA の研修のねらいは達成できていたと感じた。

また、他の NGO スタッフからは「ワークショップに初めて参加した。ファシリテーターとしてのやり方を自分自身が学んだ。」という声も聞かれた。こういった実際のワークショップの場に NGO スタッフが参加し、「(子ども)参加」や「(子ども)権利」などの視点を共有できることは、GIA にとっただけではなく他団体にとっても有意義なことであると考えられる。このようなプログラムを開発の現場で実施することにより、子ども(住民)と開発に携わる NGO を繋ぎ、子ども(住民)と開発に携わる NGO スタッフのエンパワメントを実現するだけでなく、NGO スタッフが子ども(住民)と関わる姿勢やファシリテーションの技術や態度を学ぶことで NGO スタッフの人材育成(能力強化)にも寄与できるという可能性が、今後検討される。

② 開発教育と開発協力の連携の可能性を検証するための聞き取り調査を行う。

開発教育と開発協力の連携の形態としては a) 複数のグループもしくは団体によるネットワーキング、b) 2 つのグループもしくは団体による協働、が考えられ、また連携の目的としては、情報交換、協働による活動等が挙げられる。ネットワーキングや協働による活動においては、コーディネーションの役割が必要になるケースもある。

また、開発教育と開発協力の連携という意味では「ネットワーキングによりお互いの知恵や経験、情報を交換し、互いの活動に活かす」「それぞれの得意分野を活かして一緒にプロジェクトを実施する」「開発教育 NGO がファシリテーターとしての資質を活用し、コーディネーター的役割を担い、開発協力 NGO 同士の連携、開発協力 NGO と支援対象地域との連携、支援対象地域の住民同士の連携、開発協力 NGO と NGO のサポーター(会員)達との連携を促進する」といった 3 つの方法が考えられる。

これらのことを踏まえ、開発教育 NGO が開発協力において果たしうる「媒介者」の役割を検証するための聞き取りを以下の通り行った。

訪問団体/訪問者	内容
JICA カンボジア事務所 Project Formulation Advisor 原口明久氏 NGO Desk Coordinator 高橋優子氏	講義及び意見交換:①カンボジアにおける NGO と政府機関の連携のあり方について、②開発教育 NGO が国際協力の現場で果たせる役割(国際協力 NGO—現地住民、国際協力の現場—日本との「媒介者」としての役割)について
(特活)シェア=国際保健協力市民の会 事務所長 上田美紀氏 プログラムアドバイザー 林亜紀子氏 現地職員、農村ボランティア、他	視察:①農村地区の現状(母子への保健衛生支援現場の視察)、②日本の NGO の現場への介入方法や住民との関係作り、プロジェクトにおける住民の主体性を高めるための方法を学び開発教育 NGO の介入の可能性を検証する
Child Rights Foundation(CRF) 代表 Mom Thany 氏	インタビュー:CRF が果たしている「媒介者」としての役割について
現地で活動する日本の NGO スタッフとの意見交換会	意見交換:現地 NGO の現状と課題について、ネットワーキングの重要性及び課題について、他 NGO との連携の可能性の検証

■ 開発教育 NGO が果たしうる「媒介者」としての役割の検証

調査を通じて確認された「必要とされている媒介者の役割」を整理した。

- 1) 解決すべき課題を中心に据え、それに関わる全ての人たちを繋ぐ役割。
CRF における例：
 - ① 子どもと関わる全ての人たちに対して課題を投げかけ、政府、様々な人たちが その課題に関われるようにする。
 - ② 案件形成だけでなく、アドボカシーによる繋ぐ役割。小さなグループの意見を汲み取り、社会(政府)に伝える。彼らが話し合える場を提供する。
- 2) 政府のトップと支援の対象者を繋ぐ役割。
CRF における例：
 - ① 政府のトップと子ども達を繋ぐ。仲介者が彼らの求めていることを、自ら実施することは難しいので、必要なサポートへのアクセスを支援する。
- 3) NGO とそのサポーター(活動支援者である会員等)を繋ぐ役割。
NGO が行っている活動やその必要性を、会員の人たちにどうやって伝え、理解してもらうか…、そのための仲介役を果たす。
- 4) 開発のプロセスにおける NGO と支援地域の住民、支援地域の住民同士を繋ぐ役割。
NGO と支援地域の住民、支援地域の住民同士の良好な人間関係構築の場を提供する。
PRA の有効性の仮説からの例：
 - ① お互いが利害関係に囚われず、夢や未来を共有する場を提供する。
 HCC におけるワークショップの例：
 - ① NGO スタッフの能力強化の研修を兼ねたワークショップを実施し、ワークショップ実施後も持続可能な NGO と支援地域の住民の「媒介者」となる。
- 5) 開発協力 NGO 同士の協働を繋ぐ役割
ネットワークングにおいて、もしくはプロジェクト内での複数の NGO の協働においてのコーディネーターの役割を果たす。また、そういった協働のきっかけづくりのための場を提供する。

【考察】

開発教育 NGO である GIA の強みとしては、「ファシリテーション」能力の高さが挙げられる。これは GIA のスタッフが数多くのワークショップにおいて「ファシリテーター」の役割を担っており、スタッフが「ファシリテーター」としての能力を高めるための自己研鑽を欠かさないことが理由である。今回の調査により確認された 1)～5)の「媒介者」としての役割の中で、今後新たに GIA の強みを活かして実施できるものとして、調査員は 4)・5)に注目した。

4)は、PRA の効果の仮説や、HCC のワークショップで確認された可能性から、GIA はこの役割を果たしうる可能性が高いと考えられる。また、これまで PRA の手法に応用できるものとして「夢や未来を共有する」ということを論じてきたが、開発協力の現場において、全ての NGO が開発プロジェクトの事前調査として PRA を採用するわけではない。PRA を採用していない NGO との連携は不可能なのであろうか。

今回の聞き取り調査では、プロジェクトの事前調査を信憑性のある他団体からの情報だけに頼っているケースも確認された。もちろん、そういった調査方法でも事業が成功している例は多々あるが、そのような団体においても「スタッフと住民、住民同士の良好な関係性の構築の場」や「活動が受け入れられない場合等のワークショップを活用した住民達との話し合いの場」を望む声が聞かれた。したがって、NGO と住民を繋ぐ「媒介者」としての役割が望まれるのは、開発プロジェクトの事前の段階だけではないことが確認できた。

利害関係を抜きにした「夢や未来」の共有は、これまでの GIA のワークショップの参与観察からも人々の良好な関係性を築くのに役立つことが確認されているが、実際に開発に着手する団体が実施するのは難しく、外部者が必要となることが予想される。GIA は、ファシリテーションの資質を活かして、その役割を果たすことが可能である。また、今回の HCC のワークショップにおいて、NGO スタッフと共

に活動を行い、そこにスタッフの能力強化のためのねらいを設定することで、住民と NGO スタッフのエンパワメントを実現できるだけでなく、NGO スタッフの人材育成(能力強化)にも寄与できる可能性があることを感じた。

5)のネットワーキングや協働におけるコーディネーターの役割に関して、GIAの事務能力とファシリテーション能力の双方を鑑みても、担うことは可能であろう。しかしながら、5)に関しては今回の調査で労力を要することが確認され、あくまでも「媒介者」としての役割のためだけに様々なネットワーキングに携わるといえるのは、現在のGIAの組織規模からは困難であると予想される。したがって、5)においてはGIAがネットワーキングに何らかのメリットを感じて加わる、もしくは自らが新しいネットワーキングを構築する際に、「きっかけづくりの場の提供」と「ネットワーキングや協働の開始直後から活動が軌道に乗るまでの短期間のコーディネーターとしての役割」を担うことが適当であると考えられる。

4)カンボジア国における調査・研究(第2回)

実施期間:平成19年3月11日(本邦発)～平成18年3月19日(帰国)

調査地:カンボジア国プノンペン市

調査形態:JICA 市民参加協力事業『カンボジア国コミュニティー・ベースの子どもエンパワメント・プロジェクト』のための調査ならびにチームビルディング事業

ワークショップの参与観察、半構造インタビュー、

協力機関・団体:(順不同)

- ・(社)シャンティ国際ボランティア会(SVA)
- ・JICAカンボジア事務所
- ・国際子ども権利センターカンボジア事務所
- ・Health Care Center for Children(HCC)

目的:—住民のニーズに基づいた具体的なエンパワメント指標を解明する

—住民のニーズを引き出す手法としての「PRA手法」の有効性を探る

—開発教育NGOの開発協力における「媒介者」としての役割を検証する (※4)

期待される成果:

これまで示唆してきた「GIAが効果の高いPRAプログラムを提供できる可能性」が検証され、プログラムの有効性と改善点が明らかになる。

本プログラムの参与観察と住民の発言の記録から確認された住民の意識変容を「エンパワメント」の視点から整理し、その整理から得られた結果と本プログラムの参与観察およびSVAスタッフのインタビューで得られた地域の情報を総合して、「住民のニーズに基づいたエンパワメントの指標」の抽出が行われる。

協力団体であるSVAスタッフと住民を繋ぐ「媒介者」の役割を、開発教育NGOであるGIAがいかに果たしうるか、本事業全体におけるSVAスタッフの発言および意識変容の観察記録から考察される。

① PRAの要素を含む開発教育の視点を取り入れたワークショップ・プログラムの参与観察からの考察

■ プログラムの概要

〈ねらい〉

- 1. スラム・コミュニティの子どもを取り巻く環境が明らかになる
- 2. スラム・コミュニティの子どもの経験(起こったこと、関わった人、将来のビジョン、価値等)が明らかになる

〈対象〉 スラムコミュニティの子ども(12名)、大人:子ども達の母親と住民委員会の委員(13名)

※4 ここに掲げた目的は、調査員の調査目的であり、プロジェクトの本来の目的は「1:プロジェクト形成に向けたスラムにおける子どものニーズおよびベースライン調査を実施する、2:プロジェクト実施に向けたパートナー団体のスタッフならびに関係者とのチームビルディングを行う」である。

<内容>

	内容	ねらい
大人	(1 日目) ① グルグル・自己紹介 ② プログラムの説明 ③ カラー・ワークショップ ④ フォト・ワークショップ	① 関係をつくる、お互いが知り合う ② 理解を得る ③ 経験を意識化する ④ 子どもの大切なものを意識化する
	(2 日目) ① アイスブレイキング(ゲーム) ② ストーリーテリング ③ マッピング ④ Dream Tree	① 関係をつくる ② 経験を語る ③ コミュニティ(環境)を意識化する ④ 将来のビジョンを意識化する
子ども	(1 日目) ① アイスブレイキング(ゲーム) ② グルグル・自己紹介 ③ WSのルール説明 ④ カラー・ワークショップ ⑤ フォト・ワークショップ	① 関係をつくる ② 関係をつくる、お互いが知り合う ③ 関係をつくる、理解を得る ④ 経験を意識化する ⑤ 子どもの大切なものを意識化する
	(2 日目) ① 前日のふりかえり ② ストーリーテリング ③ マッピング ④ 地域の課題について考える ⑤ Dream Tree	① 理解を得る ② 経験を語る ③ コミュニティ(環境)を意識化する ④ コミュニティ(環境)を意識化する ⑤ 将来のビジョンを意識化する

【調査方法】

ワークショップの参与観察を行い、プログラムの中での住民の会話や様子を記録した。SVA スタッフとの打合せや反省会に同行し、スタッフの意識変容を観察した。

【エンパワーメントのプロセスおよび質的变化の抽出】

ワークショップの有効性を図るため、本プログラムの参与観察と住民の発言の記録から確認された「エンパワーメントのプロセスおよび質的变化」の抽出を行った。

表 5: エンパワーメントのプロセスおよび質的变化の抽出(ワークショップ参加住民:子どもと大人)

	形態	プロセス	質的变化
住民 (大人/母 親)	心理的エン パワーメント	<ul style="list-style-type: none"> ・参加する ・体験する ・見つめる(自分、他者、地域) ・自分と向き合う/認識する(今、未来) ・考える ・表現する(色/言葉) 	<ul style="list-style-type: none"> ・安心感を得る(発言の場を得る) ・表現の多様性を知る ・帰属意識が高まる ・好奇心が高まる ・自己決定ができる ・自分の将来(夢・希望)が描ける
	社会的エン パワーメント	<ul style="list-style-type: none"> ・発言する ・決定する ・他者の意見を聴く 	<ul style="list-style-type: none"> ・参加の場を得る ・連帯感が生まれる
住民 (子ども)	心理的エン パワーメント	<ul style="list-style-type: none"> ・参加する ・体験する ・見つめる(自分、他者、地域) ・自分と向き合う/認識する(今、将来) ・考える ・表現する(色/言葉/写真) ・決定する ・発言する ・他者の意見を聴く ・話し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ・安心感を得る(人に邪魔されず自分と向き合う場が確保できる) ・表現の多様性を知る ・表現力が高まる(自分の意見が言えるようになる) ・好奇心が高まる ・自己決定ができる ・自信を獲得する ・帰属意識が高まる ・問題/課題を認識する ・やる気がおきる/意欲が高まる ・自分の将来(夢・希望)が描ける ・主体的に学べる
	社会的エン パワーメント		<ul style="list-style-type: none"> ・参加の場を得る ・発言の回数が増える ・連帯感が生まれる ・リーダーシップを発揮する ・コミュニティへの関心や理解が深まる ・適正な情報を得る(子どもの権利)

【考察】

今回、子どもと大人に対して、ほぼ同様のプログラムを実施し、ほぼ同様のプロセスが提供されたにも関わらず、そこで確認された質的变化は異なった。一番大きな理由としては、もともと持っている子どもと大人の「自己肯定感情」の差ではないかと感じた。大人からは「文字が書けない」、「年をとっている」、「能力がない」などの発言が多くなされ、その結果、「意見を十分に言えない」、「人に遠慮する」等の姿が見られた。プログラムには大人も子どもも楽しんで参加し、それぞれに合ったエンパワーメントの質的变化が得られたため、エンパワーメントを目的としたプログラムとしては有効であったと感じた。重要なことは、同一プログラムを実施しても、同一の質的变化が得られるわけではないという認識を、事業に関わる全ての人たちが持つことである。

【住民のニーズに基づいた具体的なエンパワーメントの指標化】

援助評価作業部会(2002)によると、指標とは「量的又は質的な要素又は変数のことであり、これによってインターベンションの達成度を測定するため、支援によって生じた変化を明示するため、または開発関係者の実績(パフォーマンス)を否定する手助けとなるための簡潔かつ信頼できる手段がもたらされる」とある。また、藤掛(2003)は指標を以下のように整理している。

- 指標: 経済的、人口的ないし、社会的な課題あるいは疑問を解明するために具体的に選択された統計情報である。指標には、単一の数字、あるいは分布もある。数字は、数、百分率、比や比率で表現される。
- 定量的指標: 数量として把握できるもの。
- 定性的指標: 数量として把握できないもの。能力強化、知識向上、行動変容などの質的側面の変化や問題の原因の強弱を測るときに使われる。しかし、定性的データの定量化はできないため、議論の俎上に載せるために「語り」「行動変容」などを分析し、これらの諸事象を可視化してとらえる試みがなされている。

また、藤掛(2003)は次のようにも述べている。「定性的なデータと定量的なデータは、しばしば二項対立的に論じられることが多いが、定量的なもの定性的なもの双方をつき合わせて解釈したり、分析したりすること、そして対象地域の人々とともに考えていくこと、時間の経過とともに変化する人々の意識をも含めて考察することが、社会開発協力事業には重要である」

本報告書の中で指標化しようとしているエンパワーメントは、数量として把握できないものであるため、作成される指標は「定性的指標」となる。しかしながら、エンパワーメントの指標化において忘れてはいけないのは、ここで指標化されるエンパワーメントは、個々人の体験/経験の差異化が行われていないということである。開発の主体/当事者となる住民は、その置かれている環境は様々である。また、同じような環境下に置かれていたとしても、立場や役割、成人か子どもか、男性か女性か…などの違いで必要となるエンパワーメントの段階は異なることが「エンパワーメントのプロセスと質的变化の抽出」からも推測される。そのため、個々人の体験/経験の差異の考慮と定量的に測れる地域や住民の情報をつき合わせた解釈が必要となる。本報告書においてはエンパワーメントの指標の仮抽出に留まる。仮抽出後、実際のプロジェクトの中で指標の有効性を検討できなかったことと、定量的指標や、個々人の経験に関する情報を得ることが不十分であったことがその理由である。今後、ここでの指標の仮説を基に、実際のプロジェクトでの有効性の検討が諮られることが望ましい。

<1. 調査員が直面した困難>

a) 「住民のニーズ」の抽出

本調査で行われる指標の仮抽出は、当初の目的では「住民のニーズに基づいたエンパワーメント指標」であることが望まれていたが、調査員は「ニーズ」をいかに抽出するかという困難に向き合わなければならなかった。調査員は平成 17 年度の調査員の仮説に基づき、「(住民の) ニーズ=奪われている力」であると捉え、「住民の真のニーズ」とは「開発を支援する側が介入し、住民に『取り戻したい』と認識された『奪われている力』」であり、それらを満たすことで住民のエンパワーメントが実現すると考えていた。またそれらは住民自身がすでに意識化している「欲求」に基づくものではなく、潜在化しているものを導き出すプロセスが必要であると考えられ、そのプロセスとしてカラー・ワークショップ等の自分の内面を投影できるワークショップ・プログラムが準備されていた。しかしながら、今回の 2 日間(計 6 時間)のプログラムにおいては、通訳の人数や時間が限られていたため、住民との対話により投影された経験や欲求を明らかにし、「住民の真のニーズ」を検証するまでにはいたらなかった。「住民の真のニーズ」の抽出方法については、今後、様々な場における実践が必要であり、GIA のプログラムを実施するための「前提条件(どういった条件下であればプログラムが機能するのか)」を探ることが必要となる。これらは今後の課題である。したがって、今回はプログラムの参与観察やインタビューから得られた住民の経験(能力)、生活・人間関係・環境等の地域の情報、住民が今回のプログラムで得た「エンパワーメントの質的变化」から仮説した「住民にとって必要なもの」として捉え、そのニーズを満たすために必要なエンパワーメントとその指標の仮抽出を試みた。

b) 「エンパワーメント」の指標の考え方

「エンパワーメント」の指標は、様々な側面から考えることが可能である。したがって、どういった指標を作成すべきかを調査員は考える必要があった。例えば、藤掛(2003)は、エンパワーメントの可視化の取り組みの一例として、パラグアイの農村女性たちの「語り」と「実践」から 12 項目のエンパワーメント指標を導き出しており、それは次のようなものである。「①参画・参加した、②発言した、③意識が変化した、④行動した、⑤連携した、⑥協力した、⑦創造した、⑧新たな目標を持った、⑨交渉した、⑩満足した、⑪自信を持った、⑫運営・資金管理を行った」

また、GIA が主催した大分県日田市小河内町での PRA 研修で講師を担当したカマル・フィアル氏へのインタビューにおいて、カマル氏に「実際のプロジェクトの中で、住民のエンパワーメントをはかる基準」を質問したところ「①経済的なもの、②カースト(身分制度)、③ジェンダー、④地域的なものに分類

してみることができると思っている。そもそも全ての人に基本的な権利はある。その中で①どうして自分達の生活が貧しいのか、②どうして差別を受けなければいけないのか、等、問題を感じた時に、それを政府等に対して訴え、反発できるようになった時(コミュニティの中で、みんなで助け合って解決していく組織ができた場合、等)、それを『エンパワーメント』の基準としている」との回答を得た。

また、カンボジアの NGO である Child Rights Foundation(CRF)の代表を務めるモン・タニー氏へのインタビューで「CRF として子どものエンパワーメントをどのように捉えているのか」と質問したところ、タニー氏からは「私達が考える『子どものエンパワーメント』はとてもシンプルで簡単なもの、他人と共に生きることである。例えば、忍耐力・団結力を身につけ、お互いをケアすることができること、責任を持つこと、自分のアイデンティティを持つこと、いろいろな事柄の選択・決定ができること。」という回答を得た。

このように、指標は様々な側面から作成されており、これは個人もしくは各団体が行っている活動によって、「エンパワーメント」の実現のために寄与できることが異なるからだと言調査員は感じた。

GIA が「エンパワーメント」に寄与できるのは、ワークショップを通してであり、その種類としては「心理的なもの」と「社会的なもの」の一部であることがこれまでの調査により確認できている。それらのことを踏まえ、今回の調査においては、あくまでも「GIA における『住民のニーズに基づくエンパワーメント指標』」を作成することにした。

<2. 指標化のプロセス1>

「エンパワーメントの質的变化」の抽出内容と、本プログラムの参与観察、住民の発言および SVA スタッフからのインタビューから得られた地域の情報(生活、人間関係、環境)、等を整理した。

表 6: 大人と子どものエンパワーメントの質的变化と参与観察/インタビューから得られた情報の整理

	①エンパワーメントの質的变化	②参与観察/インタビューから得られた情報
大人	<p>【心理的エンパワーメント】</p> <p>1 安心感を得る(発言の場を得る)</p> <p>2 表現の多様性を知る</p> <p>3 帰属意識が高まる</p> <p>4 好奇心が高まる</p> <p>5 自己決定ができる</p> <p>6 自分の将来(夢・希望)が描ける</p> <p>【社会的エンパワーメント】</p> <p>7 参加の場を得る</p> <p>8 連帯感が生まれる</p>	<p>【経験(能力)】</p> <p>A 色を選ぶのに時間がかかる。色にどんな色があるのかを知らない人がほとんど。紙に塗る前に、自分の指で色を確かめる人もいる。また、カンボジアでは色に意味(イメージ)がある。</p> <p>B 文字が書けない人がいる。</p> <p>C 絵を描くことに慣れていない(地図に家を描く際、他の紙に下書きをする)。</p> <p>D デジタルカメラを使ったことがない。</p> <p>E マッピングで捉えられた「コミュニティ」は、自宅周辺がほとんど。</p> <p>F 視野があまり広くない。</p> <p>【環境/人間関係/生活】</p> <p>G 土地や家の権利を持っている人といない人がいる。</p> <p>H 住民委員長は女性で NGO の代表を務めたこともある。尊敬を集めていて、住民は従う。</p> <p>I コミュニティ内の住民の移動が多い。</p> <p>J 夫が厳しい家庭もある。(旦那が帰るまでにご飯ができていないと叱られる人がいる)</p> <p>K 子どもや夫が「病気がち」という発言がある。</p> <p>L 今の生活を「苦しい」と感じている人が多い。(定住したい。家がほしい。)</p> <p>M 「家」への執着が強い。</p> <p>N 忙しい。仕事を持つ人も多い。</p> <p>O 様々なこと(共同体について等)についてゆっくり考える余裕がない。</p> <p>P 自分に能力がないことを恥じる人が多い。</p> <p>Q 年をとっていることを恥じる人がいる。</p> <p>R 子ども達への期待が大きい(「子ども達に知識を身につけさせることが重要」だと感じている人が多い)。そのため、子ども達に日頃から「知識の大切さ」を説いている。</p> <p>S 子どもの教育に熱心である。</p> <p>T 子どもにとって大切なものは「親・知識・家」と答える人が多い</p> <p>U SVA の図書館活動を喜んでいるものの、教育の場としての認識はあまりない。</p>
子ども	<p>【心理的エンパワーメント】</p> <p>1 安心感を得る(人に邪魔されず自分と向き合う場が確保できる)</p> <p>2 表現の多様性を知る</p> <p>3 表現力が高まる</p> <p>4 好奇心が高まる</p> <p>5 自己決定ができる</p> <p>6 自信を獲得する</p> <p>7 帰属意識が高まる</p>	<p>【能力】</p> <p>A すぐに集中することができる</p> <p>B クレヨンを手にとるのに時間がかかる子もいる。</p> <p>C 色塗りを楽しんでいる様子が窺える(「すぐに塗りたい!」)</p> <p>D 文字が書ける</p> <p>E デジカメを使ったことがないが、写真を撮ることを楽しんでいる。</p> <p>F マッピングで捉えられた地域は、コミュニティの中よりも、コミュニティから小学校までの道のり(コミュニティの外)が広い。</p> <p>G 咄嗟の発表等は、人と同じことを言う子も多い。</p> <p>H コミュニティーを変えたいと思っている子が多い。</p>

<p>8 問題/課題を認識する 9 やる気がおきる/意欲が高まる 10 自分の将来(夢・希望)が描ける 11 主体的に学べる</p> <p>【社会的エンパワーメント】 12 参加の場を得る 13 発言の回数が増える 14 連帯感が生まれる 15 リーダーシップを発揮する 16 コミュニティへの関心や理解が深まる 17 適正な情報を得る(子どもの権利)</p>	<p>様々な夢を持っている(将来の仕事、将来の家族、将来の家、等)</p> <p>【環境/生活/人間関係】 J「病気がち」な子もいる。 K 今の生活に「満足している」子も多い。 L 両親が忙しい。 M「大切なもの」＝「知識」「両親/家族」「家」と答える子が多い。「知識」は親や先生にそう教えられている。 N 共同体の中で働くことを希望している子もいる。 O 親への感謝の気持ちが強い。 P「いい子ども」であることが大切だと思っている。 Q 両親の言うことが常に正しいと思っている。 R 物質(ご飯、ご飯を炊く道具、お金、アクセサリ、靴、文房具、クレヨン、通学手段としての自転車等)の不足を感じている。 S 衛生面での物/人(綺麗な水、薬、医者)の不足を感じている。 T コミュニティがもっと大きくなってほしいと感じている。 U 将来は勉強を頑張って仕事に就きたいと思っている。 V 家が大切だと思っている。 W 家族とゆっくり話す時間がない。(推測) S 様々な話をする相手は友人が多い。 Y 学校は知識を得られる他に、友人と話せる場であると感じている。 Z SVAの図書館で本を読むが、教育の場としての認識はあまりない。</p>
---	--

<3. 指標化のプロセス 2>

整理された①エンパワーメントの質的变化、②参与観察/インタビューから得られた情報を整理し、それらを組み合わせることにより想定される「住民のニーズ＝奪われている力」を抽出し、それらを補う方法、補うことで住民ができるようになること、ニーズを満たした時に得られるエンパワーメントの仮抽出を行った。このエンパワーメントの仮抽出は、これまで GIA が行ってきたワークショップで得られたエンパワーメントを参考に調査員が想定した。

表 7: 大人のエンパワーメントの指標化の仮抽出

①住民(大人)のニーズの指標(仮)	②ニーズを補う方法(GIAに可能なもの)	③ニーズを補うことで住民ができるようになること	④実現され得るエンパワーメント
<p>1+2+4+A+B+C+D+F+H+P+Q</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 表現力 ・ 発言力 <p>理由: 与えられた権利を知らない 様々な表現方法を知らない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権利「表現の自由」「意見表明権」を伝える ・ 様々な表現方法を伝える ・ 発言の機会を提供する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権利を主張できる。 ・ 様々な表現方法が使える (・文字が書ける) ・ 発言できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己効力感が高まる ・ 視野が広がる ・ コミュニケーション力/表現力が高まる ・ 適正な情報にアクセスできる ・ 好奇心が高まる
<p>3+7+8+E+F+G+H+I+M+N+O+P+Q+U</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の身の回りの社会を知る ・ 課題解決力 <p>理由: 移動が多い 身の回りの社会を知る/考える機会が少ない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニティを知る機会を提供する ・ 自分達が抱えている課題について考える機会を提供する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニティの概要を知る ・ コミュニティにある資源(人を含む)がわかる ・ 問題を解決するための人/組織/団体へのアクセス方法がわかる ・ コミュニティの中で問題解決ができる ・ 新たな人との繋がりが生まれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 帰属意識が高まる ・ 連帯感が生まれる ・ コミュニティへの好奇心が高まる ・ 視野が広がる ・ 課題解決力が高まる ・ 自己効力感が高まる ・ 自己肯定感情が高まる ・ 人的ネットワークが構築される
<p>5+6+A+D+H+J+P+Q</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己決定力 ・ 自己効力感 <p>理由: 決定する場の不足 有能感を感じる機会の不足 既存の人間関係や慣習 与えられた権利を知らない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権利「表現の自由」「意見表明権」を伝える ・ 自己決定の機会を提供する ・ 参加の機会を提供する ・ 発言の機会を提供する ・ 夢や希望が共有できる場を提供する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権利を主張できる ・ 自分で物事を決定できる ・ 参加の場を得る ・ 発言できる ・ 人との関係性が変化する ・ 将来(夢)が描ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己決定力が高まる ・ 自己効力感が高まる ・ 自尊感情が高まる ・ 課題解決ができるようになる ・ 連帯感が生まれる ・ 人との関係性が変化する
<p>F+J+N+O</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自由な時間 ・ 周りの理解 <p>理由: 忙しい 周りの理解の不足 与えられた権利を知らない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 与えられた権利を伝える(当事者/周りの人々) ・ 話し合い/参加の場を提供する ・ 夢や希望が共有できる場を提供する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権利を主張できる ・ 周りの人々が権利を認めるようになる ・ 話し合い/参加の場を得る ・ 人との関係性が変化する ・ 将来(夢)が描ける/他者の将来(夢)を知る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連帯感が生まれる ・ 人との関係性が変化する ・ 参加の場を得る ・ 自己効力感が高まる ・ 自己決定力が高まる
<p>6+A+B+P+Q+R+S+T</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの教育 ・ 自己効力感 <p>理由: 有能感を感じる機会の不足 子どもの教育環境が整っていない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもと大人への社会的学習の場の提供 ・ 自分とゆっくり向き合う場の提供 ・ 教育の場が学校だけではないという「気付き」を与える場の提供 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な体験ができる ・ 適正な情報や知識が得られる ・ 自分自身を受容できる ・ 「気付き」を得て、SVAの図書館や図書館員を教育の機会の資源として認める 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適正な情報を得る ・ 自己効力感が高まる ・ 自尊感情が高まる ・ 自己決定力が高まる ・ 課題解決力が高まる

表 8: 子どものエンパワーメントの指標化の仮抽出

①住民(子ども)のニーズの指標(仮)	②ニーズを補う方法(GIA に可能なもの)	③ニーズを補うことで住民ができるようになること	④実現され得るエンパワーメント
<p>1+2+3+4+11+13+17+A+B+C+D+E+G+U+W</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 表現力 ・ 発言力 <p>理由: 与えられた権利を知らない 様々な表現方法を知らない 十分な表現の場が確保できていない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権利「表現の自由」「意見表明権」を伝える ・ 様々な表現方法を伝える ・ 発言/表現の機会を提供する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権利を主張できる。 ・ 様々な表現方法が使える ・ 発言できる ・ 発言/表現の機会を得る 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己効力感が高まる ・ 視野が広がる ・ コミュニケーション力/表現力が高まる ・ 適正な情報にアクセスできる ・ 自己肯定感情が高まる ・ 好奇心が高まる
<p>4+6+7+8+9+10+11+12+14+16+17+F+H+I+K+N+O+R+S+TV+Z</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の身の回りの社会を知る ・ 課題解決力 <p>理由: 移動が多い 身の回りの社会を知る/考える機会が少ない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニティを知る機会を提供する ・ 自分達が抱えている課題について考える機会を提供する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ コミュニティの概要を知る ・ コミュニティにある資源(人を含む)がわかる ・ 問題を解決するための人/組織/団体へのアクセス方法がわかる ・ コミュニティの中で問題解決ができる ・ 新たな人との繋がりが生まれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 帰属意識が高まる ・ 連帯感が生まれる ・ コミュニティへの好奇心が高まる ・ 視野が広がる ・ 課題解決力が高まる ・ 自己決定力が高まる ・ 自己効力感が高まる ・ 人的ネットワークが構築される
<p>1+5+6+9+10+13+15+17+G+I+M+P+Q+W+S</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自己肯定感情/自尊感情 ・ 自己決定力 <p>理由: 与えられた権利を知らない 自分とゆっくり向き合う場の不足 既存の人間関係(特に親子)や慣習</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権利「意見表明権」を伝える ・ 自分とゆっくり向き合う機会を提供する ・ 自己決定の機会を提供する ・ 参加の機会を提供する ・ 発言の機会を提供する ・ 夢や希望を共有する場を提供する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 権利を主張できる ・ 自分自身を受容できる ・ 自分で物事を決定できる ・ 参加の場を得る ・ 発言できる ・ 将来(夢)が描ける ・ 親子の関係性が変化する、友人が増える 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自己決定力が高まる ・ 自己効力感が高まる ・ 自己肯定感情が高まる ・ 自尊感情が高まる ・ 人との関係性が変化する
<p>2+4+9+10+11+A+B+C+D+E+F+I+M+Q+R+U+Z</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 知識・学力 <p>理由: 知識が大切であると思っている (いい仕事を得られるから) 教育やその手段が十分に整っていない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもへのワークショップ(社会的学習/主体的学び)の場を提供する【能力の高まりを実感してもらおう】 ・ 教育の場が学校だけではないという「気付き」を与える場を提供する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々な体験ができる ・ 適正な情報や知識が得られる ・ 「気付き」を得て、SVA 図書館や図書館員を教育の機会の資源として捉え、活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適正な情報を得る ・ 自己肯定感情/自尊感情が高まる ・ 自己効力感が高まる ・ 自己決定力が高まる ・ 課題解決力が高まる
<p>5+6+7+9+10+14+17+H+I+L+M+O+P+Q+U+W+S+Y</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 周りの理解 ・ 適正な情報 <p>理由: 既存の人間関係や慣習 与えられた権利を知らない</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 与えられた権利を伝える(子どもとその周りの大人) ・ 夢や希望を共有する場を提供する 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもが権利を主張し、大人がそれを認めることができる ・ 親子の関係性が変化する、友人が増える ・ 将来(夢)が描ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 適正な情報を得る ・ 自己効力感が高まる ・ 自己肯定感情が高まる ・ 自尊感情が高まる ・ 人との関係性が変化する

【考察】

＜1.エンパワーメント指標の仮抽出について＞

GIA が住民のエンパワーメントとして達成しうるものが④実現されるエンパワーメントであり、その達成をどのような視点で見えていくかという指標が③ニーズを補うことで住民ができるようになること、であると調査員は考える。従って、GIA がプログラムを実施する際に、④のエンパワーメント実現を目指し、②のような機会や場の提供を行い、③を住民ができるようになれば、事業におけるエンパワーメントの実現が達成できると言えるのではないかと考えている。しかしながら、これらはあくまでも仮抽出の段階であり、今後、住民との関係性が深まる中で異なる指標が抽出される可能性もある。なぜなら、今回の仮抽出が住民の潜在的なニーズへのアプローチに成功した結果、得られたものではなく、また、住民のニーズはその経験や周りの環境の変化によって、変化していくものだからである。

＜2. エンパワーメント指標の抽出方法における課題＞

今回の調査において、エンパワーメントのプロセスの質的变化や、指標の抽出を試みたが、その抽出方法を一律化することができなかった。また、エンパワーメントの指標化には、プログラムが行われる環境や参加者個人々の経験等を差異化する必要があると思われるが、その方法を現段階では確立できていない。そのため、各プログラムの指標抽出に、ある一定の信憑性を持たせることが困難であった。したがって、まずは一律化した指標の抽出方法を考える必要がある。そうすれば、プログラム毎の指標抽出がより素早くでき、一定の基準における信憑性も得られるであろう。

また、ニーズ把握に関しては、9月にHCCで実施した”Dream Tree“プログラムの実践の場を増やし、改善を重ねることで、その効果を検証し、「当事者の潜在的なニーズ(=奪われた力)」把握のための手法を確立する必要がある。また、今回のプログラムにおいては、「時間が短かったこと」がニーズの把握を阻害した大きな要因であると考えられ、どれぐらいの時間をかけるべきなのか、作業をスムーズに進めるための環境(スタッフの人数や通訳の人数等)はどうするべきか等、プログラム実施のための「条件」を探る必要があると感じた。

② 開発のプロセスにおける NGO と支援地域の住民、支援地域の住民同士を繋ぐ「媒介者」の役割の実証

9月に行ったHCCでのワークショップから、GIAは「NGOスタッフと共に活動(ワークショップ)を行い、そこにスタッフの能力強化のためのねらいを設定することで、住民とNGOスタッフのエンパワーメントが実現できるだけでなく、NGOスタッフの人材育成(能力強化)にも寄与できる可能性」を見出していた。そこで本事業においては協力団体であるSVAのスタッフと彼らの関わる地域において一緒に活動することで、GIAの「媒介者」としての役割を検証した。また、スタッフの能力強化としては「図書館活動を『表現する場』と捉え、コミュニティにおいて子どもたちにとっての『表現する場』をどのように創りだしていくことが、コミュニティづくりに役立つのか、またそのために必要なNGO/NPOや教育関係者の役割について探り学び合う」ことをねらいとした。

SVAスタッフと一緒にワークショップを実施する際は、GIAが作成したプログラムの内容や目的を事前にSVAスタッフと共有し、理解を得たところで、実際のワークショップに加わってもらうという方法をとった。また、各プログラムが終了するごとに、SVAスタッフ、通訳者、そしてアドバイザー的役割を果たしてくれた国際子ども権利センターの甲斐田氏を含めた反省会を行い、課題の共有、次のプログラムの進め方の確認を行った。

【調査の方法】

打合せから反省会までの全てのプロセスの参与観察とSVAスタッフの発言の記録から、SVAスタッ

フにとっての本研修の効果について整理する。

【参与観察とSVA スタッフの発言の記録の整理】

表9:SVA スタッフに関する記録の整理

段階	SVA スタッフの参与観察と発言の記録
事前	<p>【前日打合せ】…趣旨は理解しているが、プログラムの内容や効果をイメージしづらい様子が確認される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『参加』の概念はわかっているが、実際にやったことがない ・プログラムの趣旨は理解している様子だが、「プログラムをまずはやってみる」という姿勢で、あまり質問はなされない。 <p>【プログラム実施直前の打合せ】…住民の能力を心配している様子が確認される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「(住民は)長い文章は書けるが、たくさん書くことは難しい」 ・「地図を描くのは難しい。大人は描けるが、子どもは描けない。」
実施中	<p>【1日目】…プログラムの趣旨を十分に理解している様子が確認される。</p> <p>住民の「平和のある共同体の色は白なので、みんな白を塗りましょう」という発言に対して、SVAスタッフが「他の人の意見を尊重することが大切」と呼びかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文字を書けない人たちの隣に座り、サポートをする。 <p>【2日目】…前日に比べて、積極的に住民との対話に加わろうとする姿勢が確認される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「年老いていて考えが深くないので、申し訳ない」と言った住民に対して「年は気にしないでいい。年配の人はいろんな知識があるんだから」と言葉をかける。 ・「子どもは母親のことを考えてくれる」という住民の発言に対し、「考えるって、どういうことを？」と住民の話を促す。 ・「知識は将来のために必要」と発言した子どもに対して、「どうして知識が必要だと思うの？」と子どもの話を促す。
実施後	<p>【1日目反省会】…プログラムに関して「考える場を設ける」重要性を認識するが、提言に関しては控えめである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「難しそうだったということはなかった。難しい質問の時は答えにくそうだったが、何度も何度も説明したらわかってもらえた。」 ・「とても楽しかった。自分達の意見を表現するとてもいい場、ふだん考えないことを考える機会が持てたことがよかった。」 ・「午前中、親たちが全く考えたことのないことを、いろいろな視点から考える機会があったことがよかった。例えば、どんな色があるかも知らない人がほとんど。まず、色がたくさんあることを知り、好きな色がどれかを考えなければならなかった。」 ・「子ども達は写真を撮ることは楽しんでいて、なぜ撮るのかその意味はわかっていなかったかもしれない。」 ・「すごく楽しそうだったが、デジカメは初めてだったので撮る練習が必要。」 ・甲斐田氏の「子どもの権利条約を知っているか」という質問に対して「そういうのを聞いたことはある」と答える。 <p>【2日目反省会：午前中のプログラム終了後】…住民に効果的なプログラムを実施するため、積極的にプログラムへの提言を行う。住民の能力を不安視する意見は見られない。自分達の働きを評価するコメントが見られる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「自分達も、前日よりよく手伝えたと思う」 ・「地図作りは以外と簡単だった。説明したらわかってくれた。」 ・「今日は成果が少ないように感じた。活動が多く、時間が足りなかった。夢の部分を深められなかった。」 ・「時間がとにかく短すぎた」 ・「ストーリーテリングの時間がもう少し短くてもよいと思う」 ・「地図にもう少し時間をかけた方がいい」 ・「長い時間を地図に費やし、子ども達がいろんなことを地図に描けたほうがいい」 ・GIA スタッフの質問「時間の節約のために、話をする際にグループ分けをする方法もある。グループ分けをした方がいいか、それともみんなで実施して短めに話してもらおうか」には「みんなで話したほうがいい」と応える。 <p>【2日目反省会：全てのプログラム終了後】…子ども達の自主性/積極性を養うプログラムへの評価が得られた。今後のプログラム実施に向けて、具体的な改善策が提案された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「子どもたちが自主的に考えることができた」 ・「考える作業が多かった。考えることに時間がかかった。」 ・「考えることはストレスになると考えているか？」というGIAの質問に対しては「今まで考えたことのないことを考えるので、疲れていると思う」と答える。 ・「子ども達との接し方で言うと、質問が難しい」 ・「通訳の感じが、カンボジアの通訳と少し違う。サブ通訳を入れるといいかもしれない」 ・「子ども達が困っていることや悩んでいることを聴くことができた」 ・「子ども達に決めてもらう活動はいいと思う。カンボジアでも積極性を養う教育が行われるようになってきている。」 ・「地図は難しいけど、自分の意見を描き出せて面白いと思う。」 ・「子ども達が主体的に考えることのできる活動だったと思う。」 <p>【後日反省会】…プログラムの効果を体感し、次の機会を望む声もあるが、同時に自分達でやってみたいという気持ちが生きている様子が確認できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「大変楽しかった。子ども達にとっても、非常に楽しかったと思う。子ども達はいろんなことを今回のワークショップで学んだ」

	<p>と思う。大変、いい経験だった。いくつかの質問で答えるのが難しかったところもあったが、その過程を非常に楽しみながらやった。」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ワークショップにより、カンボジアの子ども達が自分達で考えることができるようになると思う」 ・GIA のワークシートの詳しい説明に対して、具体的にどのようにしてワークシートを使えばいいのか、どのような投げかけを住民に対して行えばいいのか、SVA スタッフから積極的に質問がなされる。また、「自分達でやってもいいのか」という質問もある。 ・コミュニティの人たちにとって、負担がかからないやり方について、提言がなされる。 ・(手束氏)子どもたちが自由に主体的に参加するワークショップという活動をあまり経験したことがなかったので、それが経験できたこと。成果よりも、子ども達が自主的にできる雰囲気を作って、その創り方をスタッフが学ぶことができたので、今回の目的は達成できたと思う。「子ども参加」は聞いたことはあつて、頭では理解しているが、やったことがないし、どうやったらいいかわからない。こうやって実際にやることによってできるようになると思うので、そういった意味でよかった。特に、我々が事業計画を作る時に、受益者の人たち、特に子どもは参加していない。通常は行政やコミュニティの中でも代表者のような方達と話をするので、それ以外の人たちとこういった形で話す場を持つことはいいこと。 <p>【後日】…SVA スタッフの本事業に関わる主体的な行動が確認された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SVA スタッフから、GIA が記録が取れなかったことを察して、住民達の名前のアルファベット表記が送られてくる。 ・「子どもの権利」や「子ども参加」について、プログラムの中で様々な助言を与えてくれた国際子ども権利センターの甲斐田氏を、SVA スタッフが交流会に招待しているとの話を甲斐田氏から聞く。
--	---

【考察】

＜1. 協力団体である SVA スタッフと住民を繋ぐ「媒介者」の役割＞

今回の事業の参与観察、及び SVA スタッフの発言の記録から、SVA スタッフとスラム住民の関係はすでに良好なものであったと感じられた。これらには、SVA スタッフの「住民と関わる姿勢」が与える影響が大きいが、この SVA スタッフの姿勢は、本事業によって構築されたというよりも、すでに彼らが資質として持っているものが多くあった。本事業においては、SVA スタッフのこれらの資質をより高めることができたことが成果であると感じた。今回、高めた資質（「スタッフの能力強化」の項目で後述）を活動の中で活かしていくことで、今後の住民と SVA スタッフの関係性がよりよいものになることが期待される。

また、SVA の手束氏からは、本事業の成果として「我々が事業計画を作る時に、受益者の人たち、特に子どもは参加していない。通常は、行政やコミュニティの代表者のような方達と話をするので、それ以外の人たちとこういった形で話す場を持つことはいいこと。」とのコメントをいただいた。今回の SVA スタッフとの活動を振り返ると、SVA スタッフは「図書館員」「支援する人」という普段の役割に捉われず、一参加者として活動に加わっていた。ゲームと一緒に笑い合うこともあれば、自分の課題や夢について住民と語り合う場面もあった。反省会の際に SVA スタッフから「子ども達の困っていることや、悩んでいることを聴くことができた」というコメントがなされたが、同時にプログラムの参与観察から、SVA スタッフが夢を語る際に、子ども達が伸び上がって耳を傾け、笑顔で拍手をおくる姿も確認された。事業の現場以外の場で、開発関係者と住民と一緒に話ができる場が、信頼関係の構築に役立つ可能性を改めて感じた。

＜2. 支援地域の住民同士を繋ぐ「媒介者」の役割＞

本事業においては、参加した支援地域の住民同士の関係が予め良好であり、ワークショップは終始和やかな雰囲気の中で行われ、「楽しかった」という感想が多く寄せられた。

ワークショップの中で、誰がどのような問題を抱えているのか、地域における人的資源はどのような人がいるのか等を住民同士がある程度確認できたと考えられるものの、本事業による成果として「住民同士の関係性の変化(新たな関係性の構築、人的ネットワークの構築)」を確認することはできなかった。これは調査員が事前に参加住民の関係性を十分に把握できていなかったことが一番の要因であり、その他、実施期間が短かったことが理由として考えられる。

＜3. 協力団体である SVA スタッフの能力強化において果たせる役割＞

前述した「本事業により高められた SVA スタッフの資質」について整理したい。

a) 「子どもの能力・可能性を信じる」

ワークショップの開始前に、何人かの SVA スタッフが持っていた「子どもには難しい」という考えが、大人によって定められた「限界」であり、子ども達は多くの可能性を秘めていることを、ワークショップを実施していく中で気付いてもらえたことは大きな収穫であったと考える。

b) 「共に学ぶ姿勢を持つ」

GIA のスタッフは、ファシリテーターとして、また全てのの人たちと関わる姿勢として、「教える」のではなく、一人ひとりの学びのプロセスにおいて「共に学ぶ姿勢」を大切にしている。今回のワークショップにおいても、SVA のスタッフにこういった姿勢を身近で見てもらい、取り入れてもらうことを期待していた。反省会において、SVA スタッフの一人から「いくつかの質問で(子ども達にとって)答えるのが難しかったところもあったが、その過程を非常に楽しみながらやった」というコメントが聞かれ、十分にねらいを達成できたと感じた。こういったことを言葉で説明するのではなく、体験から学べることは、ワークショップを共に行う利点であると考え。

c) 「子ども参加」の実践

SVA スタッフは「子ども参加」や「住民参加」の概念は知っているものの、実践の経験がないことを事前に確認しており、コミュニティにおいて「子ども参加」をどのように実現していけるのかを、共に学ぶ場にしたいと GIA は考えていた。SVA スタッフはプログラムを通して「子ども達の可能性」を知り、「子ども達が主体的に行動することができる」ことに気付き、「大人は子ども達と共に学ぶことができる」ことを実感していた。これらが彼らの今後の活動に繋がることを期待する。その第一歩として、SVA スタッフが「子ども参加」が「子どもの権利」として認められていることを知り、「子どもの権利」に関心を寄せ、主体的に学ぶ姿勢を示してくれたことは、本事業の大きな成果と言える。

本事業を通して「NGO スタッフと共にワークショップを行い、そこにスタッフの能力強化のためのねらいを設定することで、住民と NGO スタッフのエンパワーメントを実現できるだけでなく、NGO スタッフの人材育成(能力強化)にも寄与できる」という可能性の検証が望まれていた。本事業では、SVA スタッフの能力強化として設定したねらい「コミュニティにおいて子どもたちにとっての『表現する場』をどのように創りだしていくことが、コミュニティづくりに役立つのか、またそのために必要な NGO/NPO や教育関係者の役割について探り学び合う」を上記 3 つの SVA スタッフの資質を高め、SVA スタッフが本事業を通して自身の活動に対するモチベーションを高めたことにより、十分に達成できたと感じた。今後の SVA スタッフの活動に期待が寄せられる。

今後は GIA が開発協力の分野で果たしうる「役割」として、ワークショップを通じた人材育成の実施を検討することが望ましい。

<3. 協力団体である SVA と GIA の信頼関係の構築>

今回の参与観察及び発言の記録からは、SVA スタッフが徐々に住民の能力を信じ、また自身の能力を信じてオーナーシップを発揮する様子が確認された。

本事業では、GIA スタッフは日頃からスラム・コミュニティで活動している SVA スタッフを信頼し、意見を積極的に求め、SVA スタッフはその期待に応えていた。GIA スタッフは、SVA スタッフの意見を尊重し、彼らの意見を取り入れ、時にはプログラムの変更も行った。そのことが SVA スタッフと GIA スタッフ間の信頼関係を構築するのに役立ち、また、SVA スタッフのモチベーションを高めたと感じた。

<4. NGO 間の新たな関係の構築>

今回のプログラムでは、国際子ども権利センターの甲斐田氏の協力を得たことで、予期せぬ成果を得ることができた。それは、甲斐田氏と SVA スタッフの間で新たな関係性が生まれたことである。もともと、甲斐田氏と SVA の手束氏は様々なネットワーキングにより繋がりはあったものの、SVA のスラム事

業チームのスタッフ達は甲斐田氏との面識はなかった。しかしながら、今回、ワークショップを共に実施したことで、SVA スタッフが「子どもの権利」に興味を持ち、甲斐田氏に連絡を取るようになった。

そもそも、GIA が開発教育 NGO の「媒介者」としての役割を検証し始めたのは、開発協力の分野において、各団体が協力し、それぞれの専門分野を活かし、補い合いながら事業を実施していくことで、より効果の高いものを生み出せるのではないかと考えていたからである。その「媒介者」としての役割として、様々な可能性を考えてきたが、今回、ワークショップを通じて「共通体験をする中で、互いの専門性と不足しているものを認識し、それを補う必要性を感じることで、異なる活動をしている NGO 同士の新たな関係性を生み出せる」ということを感じた。

3-2. 今後の課題と対処方法

1) 内発的動機付けを実現するワークショップの可能性とそのアプローチ

GIA が実施するワークショップには「楽しさ」「喜び」「成長の実感(=心理的エンパワーメントの高まりの実感)」が伴っており、参加者の内発的動機づけの役割を担っていることが考えられ、開発協力の現場においても「人々の参加」「持続的な学習」を促進できるという可能性を有している。

GIA が実施するワークショップが「心理的エンパワーメントの実現に寄与できる」ことや、開発協力の現場において「スタッフと住民、住民同士の良好な関係性の構築の場」や「住民達との話し合いの場としてのワークショップの活用」を望む声があることを考慮すると、今後、開発協力の現場において、住民の心理的エンパワーメントや人との関係性の構築を目的としたワークショップを実施することが期待される。

また、本調査の「開発教育 NGO の開発協力における『媒介者』としての役割」で、ワークショップの場を、NGO スタッフの人材育成を目的とした「研修」として利用できることを指摘した。住民と NGO スタッフが同じ活動を通して信頼関係を構築し、同時に NGO スタッフがワークショップを通じて「参加」や「権利」の視点を得る。そして、「参加」や「権利」の視点を有した NGO スタッフが、その後、住民達と関わる中で、住民と NGO スタッフの持続的な双方向のエンパワーメントが実現できるのではないかと調査員は考えている。

今後、GIA においてはエンパワーメントを目的としたワークショップ・プログラムが「NGO スタッフの研修の場」としても機能するような工夫と実践を重ねていくことが期待され、「研修」としても機能するワークショップの活用方法が開発協力における一つのアプローチとして確立されたなら、GIA が果たしうる「媒介者」としての役割も実証されると考えている。

2) 住民のニーズに基づいたエンパワーメント指標の解明

前述したように、本調査において仮抽出したエンパワーメントの指標は、住民の真のニーズ把握が不十分であったこと、抽出方法が確立されていないこと、仮抽出後、実際のプロジェクトの中で指標の信憑性を検討できなかったことなど、多くの課題を残したことが反省される。

しかしながら、住民の真のニーズを「住民が奪われた力」と捉えるのであれば、エンパワーメント指標の解明のためには住民の真のニーズ把握が不可欠であり、その方法を確立する必要がある。

GIA が現在、実践を重ねている「Dream Tree」プログラムや「カラー・ワークショップ」は、様々な可能性を秘めたプログラムであると考えられるが、実施時間が短いと住民との十分な対話ができないことから、その効果が確認しづらい等の課題も抱えている。今後、これらの課題を改善するか、もしくは既存のプログラムで効果を出すために必要な条件を確認するか、いずれかの方法での課題の克服が期待される。

3) 住民のニーズを引き出す手法としての「PRA 手法」

既存の「PRA 研修」から「PRA 手法」の有効性の仮説を立てた。今後、その検証が望まれる。また PRA の有効性をより高め、PRA のツールに不足する部分を補えるような新たなプログラムの開発の可能性を

示唆したが、その際の注意点と思われるものを以下に整理したい。

- ・ 様々な状況に対応しうるプログラムの開発

GIA はこれまで人々の心理的エンパワメントを高めることを考え、少ない人数でのワークショップを数多く行ってきた。しかしながら、PRA や開発協力の現場においては、人数を制限できない可能性（人数を制限することによって生まれる確執等）も無視できない。また、住民の拘束時間にも限りがあることが予想される。スタッフの人数や必要な道具、実施場所の環境なども考慮に入れたうえで、野田（2006）で指摘されるように「全住民に対して平等な機会を提供する」ことを意識したプログラム開発に努め、様々な状況に対応しうるプログラム開発が今後、望まれる。

- ・ 現地の資源を利用したプログラムを実施する

調査員は、現地に何も持ち込むべきではないとは考えていない。例えば、GIA が使用している 49 色クレヨンカンボジア国でも購入可能であるが、仮にそれがカンボジア国で購入不可能だとしても、その効果が高いものであれば、持ち込むこともいいと考えている。しかしながら、もしそれらを現地の物で代替することが可能であれば、代替することが望ましい。なぜなら、ワークショップ形式の活動は「楽しさ」を伴うことから、現地の人々から自主的に「活動を継続したい」という声が挙がるケースがあるからである。その際、現地の人々のやる気を阻まないためにも、現地で代替できるものを研究することが望まれる。

4) RBA によるプログラム実施の検討

本調査により、調査員は住民がニーズ（奪われた力）を取り戻す必要性を自ら認識するアプローチとして、RBA が効果的ではないかと考えるに至った。なぜなら、「その力は本来、住民が持っているべきものである」という認識が、「権利」を用いることで容易になると考えるからである。しかしながら、現段階では RBA をどのような方法で取り入れることが効果的かは確認できておらず、その検証が期待される。

RBA において重要なことは、住民が「自分達には権利が与えられている」と感じることであり、主体的に権利を主張し、行使できるようになることである。しかしながら、様々な取り組み事例の話聴く中で「行使できるようになる」ことは非常に困難であると感じた。それは、一つは RBA の特徴的なこととして、直接支援の対象になりうる人々だけが権利を知るだけでは不十分だということが挙げられる。彼らの周りの人々や社会もが、その権利を認識し、彼らの権利を認めることが重要だからである。そのための環境作り、人的ネットワーク作りに対する支援も必要である。また、住民が「権利」を自分一人で行使しづらに際し、サポートを受けられる人/団体/機関へのアクセス方法を知っているということも重要である。

GIA が今後、RBA を取り入れる際に考えなければならないことは、当事者以外の人達への具体的な活動ではないかと考える。例えば、調査員はカンボジアのスラム・コミュニティにおいて SVA スタッフと共に実施したワークショップの事例から、GIA が子どもと大人の双方が参加できるプログラムの場を提供し、子ども達への理解を大人に深めてもらい、子どもの可能性を感じると同時にその可能性を阻まない（＝子どもの権利を守る）という共通認識を育むという活動が一つあると考えている。これまで対象者は、「大人」「子ども」と分けられることの多かったワークショップだが、一緒に実施することで、「子ども」と「大人」を繋ぐ役割をも果たせるのではないかと考えている。

また、RBA による活動の中で GIA が担える役割と担うことのできない役割を整理し、担うことのできない役割の部分の誰/どこに担ってもらおうのかを考えていく必要があると考える。GIA は「子どもの権利」の中の「表現の自由」「意見表明権」を基にワークショップ・プログラムを開発しており、それらを利用して当事者及び当事者以外の人々が権利を認識し、権利を認めることを促進することができる。しかしながら、独自の事業を行うフィールドを持たない GIA においては、地域の情報把握が不十分であることと、定期的に同じ人達に関わることが困難なため、権利を一人で行使しづらに際し人/団体/機関へのアクセス方法を十分にフォローできない現状がある。GIA が関わるフィールドにおいて情報収集に努めることも重要だが、それ以上に実際に長くフィールドで活動している団体と協働することで、人的ネットワークや地域の情報を用いた継続的な活動を実施することが重要であると考えている。

4. 所感

今回、GIA においてこのような調査機会を与えていただいたことに感謝している。調査活動を開始する以前、GIA を「開発教育ファシリテーターを派遣・育成する NGO」として捉えており、調査活動の開始当初は、その活動の幅広さにただただ驚くばかりであった。また、それらの幅広い活動の一つ一つに丁寧に取組む GIA スタッフの姿勢と柔軟性には頭が下がる思いがした。

GIA においては、一人ひとりのファシリテーション能力の高さもさることながら、「少しでもよいプログラムを提供しよう」というスタッフの熱意が、一番の魅力であると考え。時間をかけて創り上げたプログラムの中で、ファシリテーターとサブ・ファシリテーターが参加者の様子を観察し、話し合い、その場に合ったプログラムを実施するため次々と変更を加えていく…そんな場面に遭遇することが多かった。参加者の感想から、参加者の学びが確認できた時、GIA スタッフの努力と熱意が実ったと胸が熱くなる思いを何度も体験した。

GIA スタッフには、今後もそれぞれの個性を生かした活動を期待すると共に、この一年間、調査員に多くの視点と学びを与えてくれたことに感謝したい。また、調査員の活動にあたっては、GIA スタッフはもちろん、その他多くの方々のサポートをいただいた。ここに一部を紹介し、お礼を述べたい。

まず、GIA のカンボジア事業を一緒に創りあげてくださった SVA の手束さん、伊藤さん、カンボジア事務所スラム事業担当の皆さん、通訳者の中川さん、国際子ども権利センターの甲斐田さん。プログラムの中で様々な視点を共有し、子ども達と「共に」学ぶ姿勢を貫いてくださった皆さんから多くを学ばせていただいた。そして、常にカンボジアでの活動を見守り、示唆を与えてくださった JICA カンボジア事務所の原口さん、高橋さん。事業の企画から実施まで、運営面で多くのサポートをしてくださった JICA 九州事業担当の徳永さん。事例収集のための調査員の訪問やインタビューに快く協力してくださった HCC のテリーさん、CRF のタニーさん、その他の子どもに関わる活動に取り組んでいる団体の皆さん。多くの方々に支えられ、一連の事業を実施できたことに心から感謝している。

また、国内においては、PRA 研修を受け容れてくださった大分県日田市小河内町の皆さん、大分県佐伯市蒲江町の皆さん、長崎県北松浦郡小値賀町大島の皆さんに、誰よりもまずお礼を言いたい。GIA のスタッフと研修参加者を温かく迎えていただき、研修参加者と共に「地域の現状」を受け止め、考える姿勢に出会えたことは、これまで「地域開発」に携わったことのない調査員にとって、非常に貴重な経験であった。また、西川芳昭准教授、佐藤快信教授には、地域開発の視点から多くの視座を与えていただいた。そして小値賀町役場の古川さん、岩坪さん、大田さんには、実際の現場で「地域を大切に思う気持ち」と「地域に対する熱意」が「地域を動かす」ということを、体験を通して学ばせていただいた。

ワークショップの場で出会った日本とカンボジアの皆さんと、多くのことを「共に」学び、「喜び」や「楽しさ」を分かち合えたことに感謝したい。皆さんからいただいた貴重なフィードバックが調査員だけではなく、GIA にとっても大きな「学び」となったことは、言うまでもない。ワークショップの場で、短いながら皆さんと一緒に時間を共有できたことを、心から嬉しく思っている。

そして最後になったが、今回の調査の機会を与えてくださった外務省国際協力局民間援助連携室と、調査活動を様々な面からサポートしてくださった同室の峯岸さんに心からお礼を言いたい。

今回の調査活動を通して、多くの方々に出会えたことは調査員にとっての「収穫」である。一人ひとり、異なる経験や考え、バックグラウンドを持った人たちが「共に学び合う」ことで新たな可能性が開けてくることを、身をもって実感することができた。「共に学び合う」ことが、それぞれの人間性を開花させ、よりよい社会を築いていくことに寄与できることを信じ、今後も様々な場や機会に自分自身が参加すること、そしてそのような場を創り出していくことに尽力したい。

5. 付録

参考文献

- 開発教育協議会編 2002 「開発教育キーワード 51」 開発教育協議会
- 国際連合児童基金 1997 「子どもの権利条約カードブック」 日本ユニセフ協会
- プロジェクトPLA 編 2000 「続 入門社会開発」 国際開発ジャーナル社
- 住民参加によるライフスキル教育調査研究検討委員会、教育協力 NGO ネットワーク(JNNE) 2006
「住民参加によるライフスキル教育の実践事例の収集・分析とモデル形成のための調査研究」
現代農業五月増刊号 2001 「地域から変わる日本 地元学とは何か」 (社)農山漁村文化協会
- 菊池京子編 2001 「開発学を学ぶ人のために」 世界思想社
- 久木田純・渡辺文夫編 1998 「現代のエスプリ エンパワーメント—人間尊重社会の新しいパラダイム」 至文堂
- 佐藤寛 2005 「開発援助の社会学」 世界思想社
- 佐藤寛 2005 「援助とエンパワーメント 能力開発と社会環境変化の組み合わせ」 アジア経済研究所
- ジョン・フリードマン(John Friedmann) 1995 「市民・政府・NGO—『力の剥奪』からエンパワーメントへ」 新評論
- 椿原恵 2005 「開発教育の再構成 地域のエンパワーメントを実現するワークショップ」 外務省経済協力局民間援助連携室
- 中野民夫 2001 「ワークショップ 新しい学びと創造の場」 岩波新書
- 西川芳昭 2002 「地域文化開発論」 九州大学出版会
- 野田直人 2006 「セネガル総合村落林業開発計画の経験から—地域住民の自主性を引き出す援助アプローチ」 独立行政法人国際協力機構 国際協力総合研修所
- 野田直人 2000 「開発フィールドワーカー」 築地書館
- 藤掛洋子 2003 「人々のエンパワーメントのためのジェンダー統計・指標と評価に関する考察—定性的データの活用に向けて」 独立行政法人国際協力機構国際協力総合研修所
- 松尾匡・西川芳昭・伊佐淳編著 2005 「市民参加のまちづくり【戦略編】—参加とリーダーシップ・自立とパートナーシップ—」
- 松井和久・山神進編 2006 「一村一品運動と開発途上国 日本の地域振興はどう伝えられたか」 アジア経済研究所
- 森田ゆり 1998 「エンパワーメントと人権」 部落開放・人権研究所
- ロバート・チェンバース 2000 「参加型開発と国際協力 変わるのはわたしたち」 明石書店

添付資料1 開発教育ワークショップの考察対象案件

	事業	主催
1	福岡教育大学 NGO 協働連続講座「人権同和問題講座 B」	福岡教育大学 ※
2	博多女子高等学校 NGO 協働連続講座「コミュニケーション」	博多女子高等学校 ※
3	ファシリテーター養成指導者研修	大分県立生涯教育センター
4	「ネパールのカマルさんと参加型開発を学ぼう！」	地球共育の会・ふくおか JICA 九州
5	国際理解教育指導者セミナー	JICA 九州
6	「協力隊体験を伝えようワークショップ」	福岡県青年海外協力隊 OB 会 (特活) 九州海外協力協会
7	「島嶼におけり自立を目指した地域資源活用による人づくり・地域づくり」PRA 研修	小値賀町役場 JICA 九州
8	「アセアン地域振興行政セミナー」PRA 研修	JICA 九州
9	ハートフル・フェスタ「カラーワークショップ」	地球共育の会・ふくおか
10	北九州大学ワークショップ「大切なものは何ですか？」	北九州大学
11	九州国際大学ワークショップ「大切なものは何ですか？」	九州国際大学
12	久留米大学ワークショップ「大切なものは何ですか？」	久留米大学
13	「コミュニケーションで育む Dream Tree」	地球共育の会・ふくおか
14	「表現活動を通じた子どものエンパワーメントとコミュニティづくり」	地球共育の会・ふくおか

その他；研修・講演会・ワークショップへの参加

	タイトル	主催
1	「市民教育賞表彰式」講演会	(社) 中小企業経営者協会
2	福翔高等学校 授業見学、教員との意見交換会	福翔高等学校
3	森田ゆり講演会「少子化の今だからこそ考える～子どもの人権とは何か～」	NPO GGP (ジェンダー・地球市民企画)
4	ピア・コーベラ氏講演会	フリー・ザ・チルドレン・ジャパン (FTCJ)
5	「金香百合のジェンダーワークショップ」	にじいろ CAP
6	「南の子ども支援」海外研修	日本ユニセフ協会、JANIC



PRA 研修事例集

平成 18 年度 地球共育の会・ふくおか実績



PRA 研修事例集 目次

- はじめに

- 参加型開発とは(参加型開発/PRA:Participatory Rural Appraisal)

- 外部者(ファシリテーター)としての地域との関わり方を学ぶ

事例1:「ネパールのカマルさんと参加型開発を学ぼう！」(於:大分県日田市小河内)

- 地域を知る (外部者:海外研修員が見た地域)

事例2:「JICA 九州 アセアン地域振興セミナーにおける PRA 研修」(於:大分県佐伯市蒲江)

- 地域を動かす (町役場が主体となった研修)

事例3:「JICA 九州 草の根市民参加協力事業 小値賀」(於:長崎県北松浦郡小値賀町)

- PRA の今後の可能性 (開発教育の視点を取り入れた調査)

事例4:「JICA 九州 市民参加協力事業 「カンボジア国コミュニティ・ベースの子どもエンパワメント・プロジェクト」のための調査ならびにチームビルディング事業 (於:カンボジア国プノンペン市 T-86 スラム)

はじめに

地球共育の会・ふくおかは、住民主体の地域づくりをすすめる上で有効なPRA (Participatory Rural Appraisal) 手法やその概念を学ぶためのPRA研修を数年にわたって実施してきました。この事例集は、2006 年度に開発途上国の研修員や国際協力に関わりや関心のある日本の人々を対象に異なる地域で行った研修の内容や成果をまとめたものです。

住民が主体となり、地域づくりに「参加」ということはどういうことなのか、実際に地域で実践したPRA研修の経験に基づき、PRAの意義や可能性をみなさまと共有したいと考えています。当会が実施してきた研修の経験をみなさまと共有し、交流させることで、これからの地域づくりを考える一助となることを願っています

PRAがめざす「住民参加」の地域づくりを実現するためには、一人一人の住民がエンパワーメントされ、地域の課題解決に向かっていく姿勢を育める学びの場が重要だと考えています。これまで実施した研修を丁寧に検証し、より良い学びの場を創造できるように、今後も活動に取り組んでいきたいと考えています。

平成 19 年 4 月
地球共育の会・ふくおか

参加型開発とは

『参加型開発』という言葉は、主に開発途上国における村落開発において、住民たちが主体となって進める開発を指して言うことが一般的である。従来は、途上国政府や先進諸国の援助機関による一方的な開発計画によって村落開発が進められ、そこに当該地域の住民たちの意見が反映されてこなかった。しかし、住民の参加がなければ、開発事業が地域のニーズに即さないものとなり、たとえ成功した開発事業も終了後はプロジェクトが維持されず消滅したり、住民の援助への依存を生み出したりすることもある。こういった反省に基づき、住民の参加を得ることでプロジェクトの効果を上げ、持続性を高めることが期待されるようになり、また援助を通じた民主化の促進や制度の確立といった政治的背景から、国内外で住民の主体性を重視する「参加型開発」の概念が発展した。今日では、開発途上国のみではなく、先進諸国の地域開発やまちづくりにおいても、「参加型開発」は重要な概念となっている。しかしながら、参加型開発として行われている事業も、実際の「参加」のあり方は多様である。子どもや女性、貧困層の「参加」が認められていなかったり、「参加」と称して労働だけを強要されるようなケースも少なくない。このような課題を念頭に置き、「参加型開発」が住民の参加を重要視した開発を意味し、外部者が主体の開発ではないと自覚することが重要である。

「開発教育キーワード 51 第 2 章 開発理論・国際協力」より抜粋

PRA(Participatory Rural Appraisal)とは

PRAはRRA(速成農村調査法:見過ごされがちであった地域住民の知識に注目し、考案された調査手法で、外部者が対象地域の情報を抽出する)に「参加」の概念を付加して生まれた手法。調査の主体が外部者であるRRAに対し、PRAにおいてあくまでもその主体は対象地域の住民であり、外部の専門家は住民が行う調査・立案活動を促進するファシリテーターにとどまる。また、RRAでは調査結果そのものに重きを置くのに対して、PRAでは住民の問題意識やニーズに着目し、ファシリテーターの力を借りながら、住民自らが地域の現状と問題点を認識し、自分達で解決方法を模索していくそのプロセスを重視し、住民のエンパワメントを目的としている。PRAは住民の可能性を前提にしており、地元の知識、技術、文化、信仰、経験といった地元「ある」ものから住民の「できる」を見出していく。PRAの特徴としては①人々が参加／主導する、②その場所で行う、③指導権を人々に渡す、④多様性を尊重する、⑤地元の指標を使う、⑥地元の素材を使う、⑦絵や記号を用いる(非識字者を考慮)、⑧プロセスは簡単で楽しい、⑨社会変化をもたらす、⑩3つの視点からクロスチェックする、⑪PRAから行動が生まれる、⑫外部者と地元の人が幸せを分かち合う、が挙げられる。マッピング、トランセクト(経路分析)、季節カレンダー、ベン図、ランキング、インタビュー等の多種多様なツールを適材適所で活用することで、住民たちが持っている情報を視覚化し、共有することにより、文字の理解に関わらず多くの参加者の意見を反映できる。ファシリテーターはこの住民がすでに持っている知識を引き出し、かつ共有できるような「場」を設定し、住民自身によるコミュニティーの発展を模索できるよう促進する。

近年では、開発援助の対象となる現地住民だけでなく、開発に関わる専門家の活動へのかかわり方、さらには生き方も問う方向に傾きつつあり、農村開発に限らず都市や先進国でのまちづくり、教育、研究、組織づくり等々、各分野で広く応用されている。また、実践のプロセスで人々が自ら学び、行動する力をつけていく側面を重視して、PLA(Participatory Learning and Action)とも呼ばれている。

外部者(ファシリテーター)としての地域との関わり方を学ぶ

事例 1:「ネパールのカマルさんと参加型開発を学ぼう！」(於:日田市小河内)

🦋実施概要

日 時:平成 18 年 6 月 24 日(土)13:30 ~ 25 日(日)15:00 まで

場 所:大分県日田市小河内町(※注 1) 小河内町公民館及び周辺

対 象:国際協力・参加型開発に興味のある方

国際協力・開発援助の分野で仕事をしたいと思っている方

NGO・国際関係機関などで現在国際協力に携わっている方

講 師:カマル・フィアル氏

参加者:21 名(他、スタッフ 7 名)

主 催:地球共育の会・ふくおか

独立行政法人国際協力機構九州国際センター(JICA 九州)

🦋研修の目的

国際協力、開発援助において「参加型」の開発プロジェクト形成や実践の重要性が広く認識されているにもかかわらず、「参加」の本質を理解し、現場において人々の真の「参加」を実現することは容易ではない。本研修では、国際的にも評価の高い参加型開発のファシリテーターであるカマル・フィアル氏(※注 2)を講師として招き、参加型の手法や考え方、外部者として地域に関わる姿勢を学ぶこと、また、カマル氏、参加者、そして小河内の住民が経験や知恵、考え方を交換し合い、地域づくりにおける「参加」のあり方を学び合うことで、より深く「参加」について考える場とすることを狙いとしました。

注 1)大分県日田市小河内町

人口:48 人(世帯数:16)

最近の取り組み:農村サポーター制度(日田市内外から 7 人が「農村サポーター」として、休日を利用して小河内の河川美化や苗木づくりなどの作業を手伝っている。)

注 2)講師:カマル・フィアル氏

1965 年、ネパールカトマンズ生まれ。学生時代よりイギリスの開発協力 NGO「ACTION AID」のボランティアとして活動し、PRA ファシリテーターとしての技能を修得。高校教師を経て「ACTION AID」の専従スタッフとなり、1993 年よりフリーの PRA ファシリテーターとなる。これまで手がけた調査・研修は数知れず、豊富な経験、飾らない人柄、ユーモアとバイタリティ、何よりも貧しい人々の中で自分にも他者にも正直に生きようとする姿勢は、開発援助に関わるものにとって、学ぶところの多い人物である。現在では国際的にも優れた PRA ファシリテーターと見なされている。

プログラム内容

1 日目

13:30 開会・オリエンテーション

- 小河内町自治会長挨拶、主催者挨拶
- 日程説明



13:50 講義／ワークショップ開始（～18:15）

- 参加者自己紹介(長所を用いた自己紹介)
開発における「長所」とは？
- 講義・ワークショップ: 開発の概念
開発の定義／住民のニーズ／外部者の役割について
- 講義・ワークショップ: 参加型開発について
「参加」および「住民」とは？…ネパールの村の再現
参加型開発のプロセス／手法…プランニングの過程体験、発表
村歩き【トランセクトウォーク】の説明…目的及び視点の確認
- 村歩き【トランセクト・ウォーク】の実施



↑ ネパールの村をみんなで再現！
村の社会構造について考えました。



↑ 農民(裕福・中間層・貧しい)の家族、ポーターの家族に分かれて、家族の問題・夢・夢の実現のためにすべきこと…を話し合いました。



↑ 町の人の案内で、小河内を歩きました。町の人の話を聞いたり、質問をしたり…、
小河内の「いいところ」をたくさん見つけることができました。



20:50 マッピング（～22:00 終了）

- ファシリテーターに求められる資質…ゲームによる体感
- マッピングの説明／作業



↑ 拾ってきた木の枝葉、木の実、写真などを使って、素敵な「小河内マップ」ができあがりました。

🌳 小河内町住民の方々の声<1日目終了後>

- ・ 在職中に「村おこし」を目的とした様々な祭りやイベントを手がけた経験がある。これまで自分のやってきた活動に満足していたが、今日の研修を見て、他のやり方もあったかもしれないと思った。今回、初めて「参加」というものについて、真面目に考えた。そうすると自分のやってきた活動の中にも、もっと住民と一緒にになって取組むことができたものがあったのではないかと感じた。
- ・ 面白かった。この研修のいいところは、いろんな世代の人が集まっていること。いろんな立場の人が集まり、意見を出し合える場があるというのは素晴らしい。小河内も今後、こういった場づくりができればいい。
- ・ 今回は、私達も参加させてもらってよかった。自分の村と言えども、なかなかゆっくり調べたりすることはないので、今回、じっくり村のことを調べたのは面白かった。

2日目

08:30 小河内町地域作業への参加 (～10:00)

- 手順の説明／作業…グランドカバー・プランツ植え



↑ 小河内町の皆さんと一緒に、法面へのグランドカバープランツの苗植えをお手伝い。土砂降りだった雨も一時的にあがり、楽しく作業ができました。

10:15 PRA手法の習得

- 季節カレンダー、ペアワイズランキング、Tree-Diagram
- プレゼンテーション(午後からのプログラム)の説明



↑ PRA の具体的な手法(季節カレンダー、ランキング、トゥリー・ダイアグラム等)を学習。



↑ 1日目に作成したマップを前にし、プレゼンテーションの手順の確認。

12:00 昼食交流会 (※研修参加者、小河内住民が参加)

12:50 発表会 (※研修参加者、小河内住民が参加)

- 参加者によるマッピングの発表
- 住民の方々を含めたグループディスカッション
- 各グループの発表

発表会の様子

- ① 研修参加者が見つけた「小河内のリソース(資源)」を、マップと共に発表。
「薪とボイラーを使っている」「季節に合わせた食べ物がある」「太陽発電」等
- ② 研修参加者が見つけた「小河内のリソース」に対する、村人からの付け加え。
「空気がおいしくて、目にいい」等
- ③ グループディスカッション「『小河内はいいところ』だが、このままでいいのか、それとも変えていきたいのか」
「人を増やしたい。具体的に何をしたら?」「自然を大事にしたい。環境緑化に取組みたい」等、具体的な話し合いが行われた。
- ④ 自治会長の挨拶「ここでこういった研修会を開いたこと自体に私達は驚いている。今後、皆さんの意見を反映させて、私達自身が学びながらこの町づくりをしていきたい」



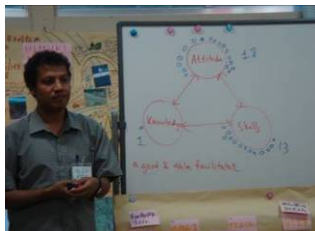
↑ 研修参加者がファシリテーターをつとめ、小河内町の皆さんにプレゼンテーションを実施。 ↑ 小河内マップを見つめる町の皆さん



↑ 小河内町の皆さんと意見交換。感想や村への思いを発表

13:50 外部者の役割について

- 講義・ワークショップ:ファシリテーターの資質/ファシリテーションのプロセス
- 研修のふりかえり
- アンケート記入



↑ ファシリテーターに必要な要素について
みんなで考えました。



↑ 2日間の研修で得たものを、ふりかえりました。



15:00 プログラム終了

小河内町住民の方々の声<研修終了後>

- ・ よそから人が来ると、いろんな話が出てくる。よそから来るからわかることもあるのだと思う。
- ・ 外部の人たちが関わることで、村の若い人たちも村のことに関心を持ってくれるのではないかと思っている。そういう場を作ることが大切。第 3 者がいれば、話しやすい話も、親子が面と向かっては話さなかつたりもする。
- ・ みんなで話ができよかった。村の人もよく話をしていた。みんな話すことがあるのだと感じた。
- ・ 村の人たちが参加者の方たちと話しているのを見て、みんな夢を持っているんだと感じた。
- ・ これまで、ああいうことがなかったから、新鮮だったし、珍しかった。
- ・ 「子どもがいないこと」を問題だと感じていた。「5 世帯ぐらい増やしたい」と言ったら、他の人に「実際に誰か来る人を探していますか？」と聞かれ、具体的にそういうことをしていかなければならないのかも、と感じた。

研修を終えた参加者の声

- ・ ファシリテーターの資質、態度、技術、姿勢を学べた。
- ・ 住民との関係作りの大切さを学んだ。共に過ごす時間を持つことで、信頼関係を作ると共に、自分の中でより相手を理解し、心のあるファシリテーションをしていくことができること。今まで効率を重視していた面が強かったので、もう少し深く整理してみたい。
- ・ 小河内の素晴らしさとそこに住む人たちの地元に対する熱意。そこに住んでいる人の地域への思いがなければ、いくらよいファシリテーションをしてもうまくいかないということに気付くことができた。
- ・ 今回の研修は「参加型」を考えるきっかけ、切り口となった。Sharing Happiness, Learning Together というのが、今までになかったアイデア(切り口)だと思った。

地域を知る

事例 2:「JICA 九州 アセアン地域振興セミナーにおける PRA 研修」(於:佐伯市蒲江)

🦋実施概要

日 時:平成 18 年 10 月 22 日(日)13:30 ~ 27日(日)正午まで

場 所:大分県佐伯市蒲江

対 象:JICA 九州「アセアン地域振興セミナー」コース研修員 8 名

(カンボジア、インドネシア、ラオス、タイ、ミャンマー、マレーシア 各 1 名、フィリピン 2 名)

講 師:地球共育の会・ふくおか 代表 吉野 あかね
地球共育の会・ふくおか スタッフ 佐藤 倫子

主 催:独立行政法人国際協力機構九州国際センター(JICA 九州)

協 力:佐伯市蒲江地域振興局

実施団体:地球共育の会・ふくおか

🦋研修の目的

PRA(Participatory Rural Appraisal)とPLA(Participatory Learning and Action)に関する基礎知識を習得し、自国の地域振興政策における新たなアイデアを見つけ出す。

🦋プログラム内容

1 日 目

10:30 講義・ワークショップ (～14:30)

- PRAについて / PRAのツール体験(ペアワイズランキング)



PRA ツール体験として、総当りランキングを実施

2 日目

10:00 講義 (～12:00)

- 蒲江町概要説明 (講師:蒲江地域振興局地域振興課職員)



蒲江地域の概要について

13:10 地域視察 (～16:00)

- 蒲江町視察:地理的条件、産業、歴史、文化、人々の暮らしぶりを理解する
(案内:蒲江地域振興課職員)
道の駅かまえ⇒たかひら展望公園⇒マンボウロード・海の資料館⇒下入津漁協⇒
仙崎公園(砲台跡)⇒元猿漁港⇒マリンカルチャーセンター着



於:たかひら展望公園



於:海の資料館



於:下入津漁協

16:10 ワークショップ (～17:00)

- 地域視察での学びの共有



ワークショップ:地域視察で得た蒲江の資源(資源)分析



3 日目

9:00 町歩き【トランセクトウォーク】（～11:00）

- ※ 2グループ(漁業及び水産加工業が盛んな地域と農業が盛んな地域)での実施
- ※ 案内役に地域振興課の方々が1名ずつ



トランセクト・ウォーク 於:蒲江浦



11:00 浦づくりの会(※注3)の方々との意見交換会（～12:30）

- 浦づくりの会の活動について、活動ビデオ紹介（講師:浦づくりの会 会長）
- 蒲江の特産品の説明及び試食会
- 「地域づくり」についての意見交換会



講義:浦づくりの会の活動について
(講師:浦づくりの会 会長 坂本氏)



蒲江の特産品の試食を兼ねた
意見交換会の様子



浦づくりの会メンバーの皆さんが製作した
緋扇貝のトーチを前に記念撮影

13:00 マップ作成（～14:30）

- 2グループ(トランセクトウォークのグループ)に分かれて作業



トランセクト・ウォークで発見した蒲江の資源を
表したマップを作成



14:30 インタビュー練習（～15:30）

- 講義:セミストラクチャード・インタビュー(半構造インタビュー)について
- ワークショップ:良いインタビューと悪いインタビュー

16:00 グループインタビュー（～17:00）

- 蒲江翔南中学校訪問
- 2グループに分かれて中学生へのインタビュー実施（蒲江、生活、夢について）



インタビュー練習の様子



中学生へのグループインタビュー



梶川教頭先生、生徒の皆さんとの記念撮影

19:00 翌日のインタビュー準備（～20:30）

- グループインタビューの反省
- ワークショップ:訪問先のインタビュー項目の作成

4 日目

09:00 インタビュー①（～11:30）

- ※ 4グループに分かれて、各インタビュー先訪問（観光関係施設、福祉施設）

13:00 インタビュー①の内容共有（～14:00）

14:30 インタビュー②（～17:00）

- ※ 4グループに分かれて、各インタビュー先訪問（漁業関係施設、教育福祉施設）



里の駅 藤本氏へのインタビュー



大分県漁協蒲江支店長 山本氏へのインタビュー



屋形島で緋扇貝の養殖をしている後藤氏へのインタビュー

17:30 講義（～19:00）

- 「蒲江の地域振興について」（講師:ブルーツーリズム研究会 会長 橋本氏）



地域振興における、リーダー(人材)育成の重要性を実感した研修員達

5 日目

(会場:大分県佐伯市蒲江 マリンカルチャーセンター)

09:00 発表会の準備 (～17:00)

- インタビュー内容の共有、ベン相關図作成、SWOT 分析
- 発表練習



ワークショップ:インタビュー内容の共有



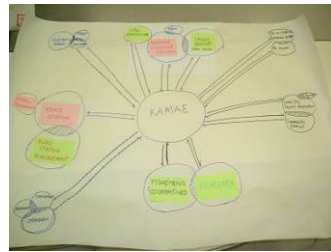
SWOT 分析「蒲江の地域振興」の実施



ベン相關図の作成



インタビュー結果のまとめ



研修員が作成した蒲江の地域振興に関するベン相關図

18:30 発表会／交流会

- SWOT分析に基づいた2グループの発表
- 質疑応答(蒲江住民の方々と交えて)

発表会の様子

- ① 研修員がSWOT分析に基づき、蒲江の強み・機会・可能性を、マップと共に発表。
強み:水産業、よいリーダーに恵まれている、豊かな文化遺産
機会:蒲江にゆかりのある著名人との連携、一村一品の理念
可能性:農産物・水産物に付加価値をつける、観光振興、若いリーダーの発掘、等
- ② 蒲江町の住民から、発表に対する質問
漁協のどこがいいと思ったか、蒲江のような入り江がある国で養殖業は行われているか、等
- ③ 交流会
研修員と住民の方々が自由に話し、それぞれの国や地域についての情報交換を行った。



インタビュー結果のまとめやSWOT分析を活用した、研修結果の発表



蒲江でお世話になった方達との記念撮影

6 日目

(会場: 大分県佐伯市蒲江 マリンカルチャーセンター)

09:00 研修のふりかえり (~10:00)

- 研修で学んだことを各研修員が発表

11:00 佐伯市表敬 (~12:00)

12:00 プログラム終了

蒲江町住民の方々の声

- ・ 外国の方が、蒲江のことを考えてくれるのは面白かった。発表会での分析も「なるほど」と思うものがあった。
- ・ 日本のこと、日本人のことをとてもよく言ってくれる研修員の方がいて、そんな風に思ってもらえているということをみんなに伝えていく必要があると感じた。外国の人がいいと感じてくれることを、残していきたい。

研修を終えた研修員の声

- ・ 地域の人が望んでいるもの、ニーズに耳を傾けること、PRA の手法を学ぶ中で、私たちは地域、そしてそこにある資源をどのように見て、分析するかということを学んだ。
- ・ 研修を通じて、住民がどのような生活をしているのか、住民が地域の開発にどのように関わっているのか、知ることができた。その中で、住民が自分達自身が町づくりにもどのように貢献できるのか、ある程度認識があるように思った。また、参加型開発における中央政府・自治体の役割についても学べた。
- ・ いろんな分析をしながら、かつ振り返りをするという過程を踏む必要があることを学んだ。
- ・ 今回、気付いたことは、住民の考え方・見方というのが一人ひとり違うのだということ。必ずしも、一人の意見を聞いて、それが住民の意見を代表していると思っはいけないということ。できるだけ多くの人の話から多くの情報を集め、それが意見なのか真実なのかを考えなければならないことを学んだ。また、情報交換の際にグループの仲間の意見を聞いたが、それをそのまま受け容れる必要があると感じた。誰もが意見を言う権利を持っている。
- ・ いかに地元の資源、または地元を調査し、分析するかということを学んだ。また、地域開発にいたい誰が参加しているのか、またどの組織が重要な役割を果たしているのかということを考え、地域のどのような人たちがメインアクターとなるのかということも学んだ。そして、この蒲江では、お年寄りが若者と協力して、歴史や伝統を次の世代に伝えるということをしているということも学んだ。

地域を動かす

事例 3:「JICA 九州草の根技術協力事業 地域提案型」(於:小値賀)

🦋実施概要

日時:平成 18 年 10 月 6 日(金) ~ 9 日(月)

場所:長崎県北松浦郡小値賀町笛吹 及び 大島

対象:平成 18 年度『島嶼における自立を目指した地域資源活用による人づくり・地域づくり』研修
コース 研修員

講師:地球共育の会・ふくおか 代表 吉野 あかね

参加者:4 名

主催:小値賀町役場

独立行政法人国際協力機構九州国際センター(JICA 九州)

実施団体:地球共育の会・ふくおか

🦋研修の背景

小値賀町は過去 5 年間、JICA の技術研修を町で受入れてきた実績を持つ。その 5 年間に、JICA の研修員達は小値賀町で認識されるようになり、彼らとの交流を小値賀町住民が楽しみにするようになった。また、町役場は、JICA 研修員の受入れが、住民が自分達の住む地域のことを考えるきっかけとなっていることに気づいており、小値賀町の地域振興のためにも、JICA 研修員の受入れの機会を継続して持ち続けたいという思いがあった。そこで、平成 18 年度より JICA 九州の「草の根技術協力事業」の「地域提案型」に小値賀町役場が事業を提案。『島嶼における自立を目指した地域資源活用による人づくり・地域づくり』コースと題して島嶼からの研修員の受入が開始した。

(なお、本研修の開始にあたっては、小値賀町役場職員が、当会主催の「ネパールのカマルさんと参加型開発を学ぼう！」に参加し、そこで認識した住民との関係づくりの重要性を本研修に活かし、住民委員会を設置。委員会のサポートをし、プログラムの企画までを住民主体で行っている。)

🦋研修の目的

- 1) 小値賀型の住民参加型地域づくりの実体験
- 2) 国際協力／日本の町づくりで実践される手法の体験
- 3) 大島住民が参加する PRA のファシリテーターを研修員が体験する(計画・実践・気付く)

🦋 プログラム内容

1 日目

自己紹介

- 簡単な自己紹介と小値賀の印象について

講義、ワークショップ

- ビデオ視聴(ガーナとインドの事例)
- RRA と PRA の違いについて
- PRA のツール演習:小値賀のいいところ/改善点探し
ペアワイズランキング実施



PRA ツール演習

2 日目

講義、ワークショップ

- 「ファシリテーターの資質」、「参加」について
- PRA のツール演習:ベン相関図作成、インタビュー練習



講義、PRA ツール演習

3 日目

トランセクトウォークとマッピング

- トランセクト・ウォークの目的と視点の確認
- トランセクト・ウォーク(研修員/学生のグループに分かれて実施)
- マッピング
- マッピングの発表

大島住民との交流会



トランセクト・ウォーク

4 日目

発表会

- グループ毎に発表(住民 2 グループ、研修員 1 グループ)
- 質疑応答
- 子ども達の夢「将来の大島」の発表

終了



住民達とのトランセクト・ウォーク



発表会の準備(住民)



発表会の様子

当日は、子ども 8 名(女児 3 名、男児 5 名)、女性 6 名、男性 10 名の大島住民の参加があった。

- ① 住民にとっての「大切な場所/物/事象」をマップに表し、そのうちグループ内でランキングした上位 3 つを発表
「子ども達が楽しみにしている祭りの場所」「子ども」「自力更生の碑」等が挙げられた。
- ② 研修生が考えた「大島のリソース」を発表
「大島の人々の助け合いの精神」「文化」「土地の管理方法」等が挙げられた。
- ③ 研修員と住民が互いに質問やコメントを投げかけあう。
研修員⇒住民「島にスーパー等があった方がいい？」
住民⇒研修員「遠いところからやってきて、自分達の島と比較した時に、大島から学べることはある？」等
- ④ 子ども達が「夢(将来の大島の姿)」を発表
「お父さんのように大きなお魚をとる漁師さんになりたいから、お魚がいっぱいいる綺麗な海がいい。」
「大人になった時、大島に電車が走っていて、ジェットコースターもあったらいい。」等



住民による発表



子ども達の夢(絵)の発表



小値賀町大島住民の方々の声

【大人の方達の感想】

- ・ 初めて知った大島があった。普段、なかなか聞かないような島の昔の話を、お年寄り達から聞くことができた。
- ・ 最初はどうか…と思っていたが、ああしてみんなで寄ったら、面白かった。
- ・ 子ども達が将来の大島の絵を発表したのは、よかった。子どもが大人の思っているようなことを描いていた。
- ・ 大島をどうするか、という話を、日頃から若いお父さん達はしている。大島のこれまでの行事なんかを残しながらもお金を得る方法を考えていかなければならない。

【子ども達の感想】

- ・ 大人の人たちの前で、自分の絵を見せて発表するのは、恥ずかしかった。でも、大人の人たちが自分の意見を聞いてくれたことは、嬉しかった。
- ・ いつか海外に行ってみたい。JICA 研修員の人たちの国に行ってみたい。
- ・ 大島の大切な場所は、大島全部。大島はどこが欠けてもダメ。
- ・ みんなで島を歩いた時に、島の昔の学校の話とか、初めて聞いた話があった。

研修を終えた研修員の声

- ・ ファシリテーターの態度や技術を学んだ。
- ・ 一人ひとりを大事にすること。一人ひとりが知っていることが重要なことであると感じた。
- ・ 調査で歩いている時はうまく参加できなかった人が、発表の準備をしている時には参加しているのを見て、自発的に参加するのを待つこととそれを促すことの大切さを学んだ。

PRA の今後の可能性について(開発教育の視点を取り入れた調査)

事例 4: JICA 九州 市民参加協力事業「カンボジア国コミュニティ・ベースの子どもエンパワーメント・プロジェクト」のための調査ならびにチームビルディング事業
(於:カンボジア国プノンペン市 T-86 スラム)

🦋実施概要

日 時:平成 19 年 3 月 11 日(日) ~ 18 日(日)

場 所:カンボジア国プノンペン市 T-86 スラム

対 象:T-86 スラム住民(大人は子どもの母親・祖母及び住民委員会委員、子どもは 10~20 歳)

参加者:大人 13 名、子ども 12 名

講 師:地球共育の会・ふくおか 代表 吉野 あかね
地球共育の会・ふくおか 事務局長 椿原 恵

主 催:地球共育の会・ふくおか

独立行政法人国際協力機構九州国際センター(JICA 九州)

協 力:社団法人 シャンティ国際ボランティア会
国際子ども権利センター

🦋事業の背景

地球共育の会・ふくおかは、PRA 研修や地域づくりワークショップを実施してきた経験から、「地域のニーズ」に即し開発教育の視点を取り入れたワークショップは、人々のエンパワーメントを実現し人間開発を促進する可能性が大きいという認識を深めてきた。また、平成 17 年度からは、カンボジア国にて子どもの権利と子ども参加の観点を重視し開発したワークショップを行い、途上国を対象とした実践と国内における取り組みを繋げることにより、双方向のエンパワーメントを実現することに力を注いできた。その中で、開発教育と開発協力を繋げることが、開発協力の場において住民相互のエンパワーメントを実現することに効果的であり、住民の主体的な行動を促進することができるのではないかと考えるに至った。

住民自らが地域の現状と問題点を認識し、自分達で解決方法を模索していく開発のプロセスを重視して生み出された PRA。ここに開発教育の視点を取り入れることで、調査においても、援助する側、される側という関係性に変化を及ぼすことができ、調査という機能のみではなく、住民自らが何かに取り組みたいというエネルギーを産み出すことにもつながるのではないかと考え、その可能性も念頭に置き、本研修が組み立てられた。

なお、本事業において重視した点は、統計などの数値的な情報収集ではなく、期待される効果1)

-2 と2)-1(後述)である。なぜならば、2日間というワークショップの機関が限られていることから、ワークショップの場でなければ把握できない情報を得ることと、ワークショップという共通体験を事業関係者(子どもなどの住民も含む)が持つことにより連帯意識が芽生えることが最も肝要だと考えたからである。活動において留意した点は、①子ども自身がコミュニティをアセスメントする過程において子ども自身がエンパワーされる方法を用いること、②事実か否かということではなく、子ども自身の体験や考え方に基づく子どもから見たコミュニティの現状を抽出することであった。これらに留意し、《PRA/PLAアプローチ》及び《権利基盤型アプローチ(RBA)》の視点を取り入れ事業を実施し、明らかになった事柄を「潜在的なニーズ」とする方法をとった。

事業の目的/期待される効果

- 1) プロジェクト形成に向けたスラムにおける子どものニーズおよびベースライン調査を実施する
 - 1-1:スラムにおける子ども達の潜在的ニーズが明らかになる
 - 1-2:スラムの子どもが認識している子どもを取り巻く環境や経験について把握できる
 - 1-3:スラムにおける住民委員会の機能と役割を把握できる
- 2) プロジェクト実施に向けたパートナー団体のスタッフならびに関係者とのチームビルディングを行う
 - 2-1:プロジェクトの関係者がワークショップに関心を持ち、プロジェクトへの参加意欲が高まる
 - 2-2:プロジェクトにおけるキーパーソンを把握できる
 - 2-3:プロジェクト実施のための協力体制が整う

プログラム内容

1 日目

(会場: カンボジア国プノンペン市 T-86 スラム内 コミュニティ図書館横集会所)

【午前:大人対象プログラム】

08:00 オリエンテーション

- 挨拶
- 自己紹介「ぐるぐる」今の気持ちを伝え合う
- プログラムの説明、会の活動紹介

08:50 カラー・ワークショップ

- 自分を色や言葉で表現する
- 家族/友達/コミュニティを色で表す

10:00 フォト・ワークショップ

- 大切なものは何ですか？
- 大切なものの写真撮影

11:00 1 日目プログラム終了

【午後:子ども対象プログラム】

13:30 オリエンテーション

- 会の活動紹介
- 自己紹介「自分を動物に例えると？」
- アイスブレイキング:ゲーム「家・豚・あらし」

14:10 カラー・ワークショップ

- 自分を色や言葉で表現する
- 家族/友達/コミュニティを色で表す

15:10 フォト・ワークショップ

- 大切なものは何ですか？
- 大切なものの写真撮影

16:20 ふりかえり

- 一日の活動の感想

16:30 1 日目プログラム終了

2 日目

(会場: カンボジア国プノンペン市 T-86 スラム内 コミュニティ図書館横集会所)

【午前:大人対象プログラム】

08:00 オリエンテーション

- 1 日目ふりかえりと 2 日目プログラム確認
- アイスブレイキング:ゲーム
「家・豚・あらし」、カンボジアの遊び
- 前日撮影した写真の配布

08:35 ストーリー・テリング

- 写真をもとに「大切なもの」について語る

09:40 マッピング

- コミュニティ・マップの作成
- 「大切なもの」「資源」をマップ上に落とす
- グループ毎のマップの共有

10:45 Dream Tree

- 自分達の夢を思い描き、語る
- Dream Tree 作成

11:00 プログラム終了

【午後:子ども対象プログラム】

13:30 オリエンテーション

- 1 日目ふりかえりと 2 日目プログラム確認
- 前日撮影した写真の配布

13:35 ストーリー・テリング

- 写真をもとに「大切なもの」について語る

14:10 マッピング

- コミュニティ・マップの作成
- 「大切なもの」「資源」をマップ上に落とす
- グループ毎のマップの共有

15:30 Dream Tree

- コミュニティの問題について考える
- 5 年後、問題はどのように解決可能?
- Dream Tree 作成(5 年後のコミュニティ)
- 自分達の夢を思い描き、語る

16:30 プログラム終了



1 日目:アイスブレイキング(ゲーム)



1 日目:カラーワークショップ



1 日目:カラーワークショップ



2 日目:マッピング



2 日目:マッピング



2 日目:コミュニティの問題を考える



2 日目: Dream Tree 作成



2 日目: Dream Tree 作成



2 日目: Dream Tree 作成・発表

🦋 ワークショップの中で出てきた子ども達の夢

- ・ 将来は両親を助けるため、いい仕事に就きたい。
- ・ 病気の人を治療できる医者になりたい。
- ・ 共同体(コミュニティ)の中で仕事をしたい。
- ・ いい家族、夫、それから孫がたくさんほしい。先生になりたい。



🦋 コミュニティの問題点⇒望まれる5年後の変化

- ・ きれいな水がない ⇒きれいな水が手に入るようになっている
- ・ 家がない(借りているだけ) ⇒自分が生活する家を借りなくてもよくなっている
- ・ 薬がない ⇒薬が手に入る
- ・ 仕事がない ⇒仕事を得ている(教員/指導教官/医者/経営者)
いい仕事を得るために勉強を続けている
- ・ お金がない ⇒家を買うためのお金を持っている
- ・ 道が狭い ⇒大きな道があって、共同体自体が大きくなっている
- ・ 学校に行く交通手段がない ⇒バイクや自転車などの交通手段を手に入れている
- ・ 勉強道具が十分でない ⇒文房具(ノートや本)が十分に手に入る

👥 ワークショップを終えた子ども達の声

- ・ 楽しかった。いろんな活動があって、いろんな経験をすることができた。
- ・ 地図を描くことが楽しかった。
- ・ 2日間の全部の活動が楽しかった。
- ・ 共同体について考えたことが、強く印象に残った。

SVA スタッフの声

- ・ 参加住民は難しい質問の時は答えにくそうだったが、何度も何度も説明したらわかってもらった。
- ・ 子ども達が自主的に考えることができていた。ワークショップにより、カンボジアの子ども達が自分達で考えることができるようになると思う。
- ・ とても楽しかった。自分達の意見を表現するとてもいい場だと感じた。参加住民にとっては、普段、考えないことを考える機会が持てたことがよかった。
- ・ これまで全く考えたことのないことを、様々な視点から考える機会があったことがよかった。例えば、どんな色があるかも知らない人が、まず、色がたくさんあることを知り、好きな色がどれかを考えなければならなかった。
- ・ 自分の暮らす地域について考えることができたことがよかった。
- ・ 楽しかった。子ども達にとっても楽しかったと思う。子ども達はいろんなことを今回のワークショップで学んだ。大変いい経験だった。答えるのが難しい質問もあったが、答えを出すまでの過程を非常に楽しみながらやっていたと感じた。
- ・ 自分達で、今後(同様の活動を)やってみたい。

参考

「開発教育キーワード 51 第 2 章 開発理論・国際協力」

「続・入門社会開発」プロジェクト PLA 編

外務省ホームページ 「PRA 入門ワークショップ」

(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/kaikaku/oda_ngo/shien/02_kyoiku/edu03a01.html)

Global Link Management ホームページ 「語彙集」

(<http://www.glm.co.jp/termlist.html>)

『市民・政府・NGO～「力の剥奪」からエンパワーメントへ』JOHN FRIEDMANN 著